
空からの贈りもの

大輔華子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空からの贈りもの

【Nコード】

N8066K

【作者名】

大輔華子

【あらすじ】

いわゆる『戦前』生まれの女性、ハナは、偶然か必然か、大きな力にめぐりあい、人類が過去にも未来にも決して経験することのないことに遭遇する。

<○>

その児童養護施設（旧称孤児院）では、毎年クリスマスの日までに届けられた贈

り物が、まとめて皆に配られます。

贈り物は二種類の柄の紙に包まれていて、品物は見えません。

施設の人が大体の判断をして男の子用と女の子用に分けているので

誰にどの品物、ということが決められているわけではありませんが、必ず過不足

がないように人数分用意され、年齢の小さい子から順番に一つづつ好きなものを

取っていきます。

品物が見えないので、皆、想像たくましく真剣です。

必ず、毎年何人か、どうしても迷ってしまつて、選ぶことのできない子がいます

が、そこは、施設のお兄さんやお姉さんがよく心得たもので、「これがいいよ。

いいかもよ。」と言つて、手に取つてその子に渡してあげます。

その年私は部屋で最年長でしたので、私が選ぶときには包みが二つしか残つてい

ませんでした。

男の子用の大きな包みと、女の子用の小さな包み。

私は女子、もう一人の子は男子でしたので、お互い選択肢は一つしかありません。

私への贈り物は、耳にピンクのリボンをつけたウサギのぬいぐるみでしたが、一

つ気に食わなかったのは首から下が、スカートをはいた人間の女の子で、初めはちよつと気味悪かったのを覚えています。

どうせぬいぐるみなら、全部可愛いウサギにしてもらいたかった、子供心にそう

思いました。

もう一人の男の子は大きな宇宙ロケットでした。

私は羨ましくてたまりませんでした。

でも、その子は何だか不満そうでした。

私は、そのロケットに何か夢のようなものを抱き、ときどきロケットを借りて、

それに自分の貰ったウサギをつかまらせて、「ブーン、ブーン。」と施設の大部

屋を歩き回っていたのを覚えています。

『ブーン、ブーン』に飽きると、私はしばらく施設の窓から空を見て過ごします。

ウサギのぬいぐるみはいつしか首がくたくたになり、手垢で薄茶色になっていました。

<—>

時は一九三九年（昭和十四年）、日本では二年前に勃発した日中戦争の激化に伴

い、七月に国民徴用令が公布・施行され、またその二ヶ月後には、欧州でドイツ

がポーランドに侵攻、その後英仏がドイツに宣戦布告し、いよいよ世界大戦がそ

の始まりを告げていた。

その二年三ヶ月の後、一九四一年の十二月、真珠湾攻撃に始まる太

平洋戦争が勃
発、その後数々の栄光と同時に悲惨の時を刻み、一九四五年、八月
十五日の天皇
による終戦の詔勅に至るまで、戦いは三年八月にもおよんだ。
そして、その時の、『敗戦の国民表明』を以って、耐えがたき歴史
の一幕をひく
こととなった。

<二>

私の名は、武嶋八ナ。

生まれは一九三九年（昭和十四年）のいわゆる戦前生まれ。

生まれた地も、そしてこれまで十二年間育ってきた地も、このS県
のT郡N村で
す。

私の家の近く、川の少し上流のところにかけている橋を渡ると、
向こう側には
古い学校があります。

私が尋常小学校の初等科に入学する前から、都市の空襲を避け東京
の「鉄砲洲国
民学校」から大勢の学童が疎開してきて、大きなお寺が宿舎兼学校
になって人が
あふれ、翌年終戦時には三百名近い学童がそこで暮らし、生活指導
を受けていま
した。

そんなことはさておき、まずは、私の家族構成からご紹介。
お父さん、『一馬』。

一九一六年（大正五年）生まれ。

研究員だそうです。

何の研究をしているかと聞かれても、私には人に説明することはできません。

悪しからず。

お父さんは毎朝八時過ぎに仕事に出掛けていき、決まって夕方五時半には家に帰ってきます。

私はお父さんに仕事場には連れていってもらったことはないし、いつも出かける

のは学校と真反対の方向でした。

実は私は双子の姉で、弟は『春雄』と言います。

春雄くん、と私が呼んでいる彼は、二年前、お父さんの仕事場へ、私と一緒に連れて行きました。

そこには、古びた屋敷があつて、入り口の石でできた門のところには『羽柴数理

研究所』という木でできた看板が上下錆びかかった針金でくくりつけてありました。

門を入つて、春雄くんところり庭の方に回ると、縁側の前はガラス窓になつて

いて、その奥の障子が半分ほど開いていたので、近づけば充分、中の様子を伺い知ることができそうでした。

春雄くんに背中を小突かれて縁側に恐る恐る近づき、覗いてみると中の畳の部屋

では大人が二人で並んで本を読んでいました。

そのときそこにはお父さんの姿はありませんでした。

私のお父さんの仕事に関する知見は、お父さんが登場しない、たっ

たのそのとき
のことだけです。

ですから、ごめんなさい。人に説明ができません。

あと、お父さんと私に関するところで、結構重要なことがもうひとつ
ありました。

私の名前は『ハナ』と言いますが、お父さんは私の事を何故か『ウ
サギ』と呼び
ます。

理由は定かではありませんが、お母さんがお嫁にきたとき、家には
ウサギがいつ
ぱいいて、私の生まれたときの顔がウサギに似ていた、という説と
団子を食べ

ながらお月見をしたあとで私を生んだので、月の餅つきウサギから
そう呼ぶよう
になった、という説があります。

どちらも、春雄くんから聞いたということ、限りなく嘘っぽいの
ですが、私の
名前が『ハナ』になる前は『月見』という名だったらしいことから
して、後の説

が私の中で有力です。

生まれてすぐのとき、私の名前が『月見』だったというのは、お母
さん自身に聞
いた話ですから。

まったくもって適当なものです。

ハナという名前も、多分、花見団子あたりから来たのでしょうか。
双子の弟が春雄くんですから。

私が『団子』にならなかつただけ、よしとしましょう。

春雄くんは、お父さんのついでに紹介してしまいましたから、私の
家族はあと、

お母さん、『ウメ』。

私の家は川の脇の道を見下ろす高台にあって、お母さんは昼間、そこから川の方

へ下りた辺りの野菜畑でいつも何かしていて、季節によっていろいろな野菜を籠

に入れてきます。

大きな冬瓜を持ってきたときは、決まって辛い唐辛子と一緒に煮て、それが食卓

の皿の上に山盛りになります。

私の口から言うのも変ですが、お母さんは昔から少し気が弱くて、いつも『はい。』

『はい。』とお父さんの言いなりになっています。

ですから、お父さんに時々叩かれてもひっそりと泣くだけです。

でも、私は一つだけお母さんの秘密を知っています。

お母さんは、お父さんに叩かれたとき、泣きながらお父さんに背を向けて、『ア

ツカンベー』をしていました。

これを私に見られていたことを、お母さんは知りません。

私の家族のもう一人はあと、おばあちゃん、『シケ』おばあちゃんです。

シケおばあちゃんはお父さんのお母さんで、普段、お母さんとあまり口をききません。

おじいちゃんは私が生まれるずっと昔、お父さんが生まれてまもなく死んでしま

つたらしく、シケおばあちゃんは、お母さんがお嫁に来るまでお父さんとはここ

の屋敷に永い間二人でいたらしいです。

ですから、お母さんはおばあちゃんにとって、邪魔者なのかもしれ

ません。
シケおばあちゃんは、たまにお母さんと話をすると決まって機嫌が悪くなり、関係のない庭にいる野良猫のミーを蹴飛ばします。私は、いつもそんなとき、ミーをやさしく抱いてあげます。ミーはちっとも悪くないのですから。でも、ミーは何となく迷惑そうでした。

<三>

『羽柴数理研究所』は、戦前から数学者と物理学者が数人寄り集まった研究機関で、旧軍の組織下にあつて暗号解読を専門の任務としていた。

暗号解読の任務といっても、正確には、暗号を解読するのではなく、暗号の鍵

(キー)や、からくりをひたすら研究することが主で、実践にはほとんど役に立っていないかつたようである。

逆に、どうしても役に立った点をさがせ、と言われると、暗号機のロジックを設計することくらいであつた。

しかしその暗号機が実際に製作されたかどうかは誰も知らない。本人達すらもだ。

終戦を迎えると、いよいよ彼ら研究所の暗号解読に関する存在価値は皆無となつ

たが、彼らは好き勝手に自分の得意な分野を公費を使って研究するようになっていた。

もともと研究の内容が内容だけに、重要なことをしているのか、無駄なことをしているのか、研究所の外の人間にはさっぱりわからず、さらに、中央に近いところにいればまだしも、過疎地で隠れるように研究をしているため、管理の網にひっつかからない、というのも彼らを好き勝手にはさせていた理由であろう。

ある日、研究所の事務職員が彼の唯一の職務である『山の幸、調達任務』で、栗を拾いに山の奥へ進み、ちょうど峠にさしかかった辺りで、脇の笹藪の中で腰を落として休んでいると、ふと点滅している細長い『板』が目にとまった。彼はそれを手に取り、縦にしたり横にしたりして触っていると突然山の景色が変わり眩しい光が差ししてきた。

その後、研究所では、ハナの父一馬と後輩の研究者が、日夜夢中になつて、ノートに書き込まれた暗号のような膨大な記号を解読していた。彼ら二人は、列車で片道一時間半以上かけて街で購入した書籍のページを繰って計算をし、何やらノートに書き込む。この作業を繰り返した。没頭して、数日間家に帰らないこともざらにあった。そんなときは、一馬の妻のウメがせつせと三度の食事を家から運ぶ。

そんな生活が約四ヶ月間続いた。

ある日、一馬は家で夕食が終わったあと、家族の皆を集めて話を始めた。

畳の上で正面の父一馬。向かい合わせに家族を並んで座らせた。

並んでいたのは、一馬の母シケ、妻のウメ、娘の八ナ、息子の春雄。「私のこれから話すことは、家族にとっても、また我が国にとってもすこぶる重要なことである。」

我らは、この先、裏山下から川瀬に沿って上り、四ツヶ岳の頂上付近に行き、そこにてしばらく実験を試みることにした。

この実験は、我が国、いや人類にとっても、普通には経験能わない極めて稀有

(けう)なものである。「
(また始まった。)

そこにいる家族の皆がそう思ったに違いない。

しかし、次の言葉を聞いて、皆は目を丸くして身を乗り出した。

「その実験は、三日後から行いが、実験助手は娘のウサギと決めた。実験は三年間に及ぶ。その間、家族との面会はない。」

ウメ。おまえは母のシケと協力して、三年分の米と水、味噌、醤油、野菜とつけ

樽、芋、木の実、干し魚、蒔木、干草、缶詰などと、鍋釜、衣類、布団、ゴザな

ど、生活に必要な物をすべて明朝より準備し、蔵へ納めよ。」

唐突に、三年分、などと言われてもぴんとこないが、戦事中の冬支度の六回分と

考えればわかり易い。

一馬の母シケが口火を切った。

「おめえ、なんで八ナが助手だ。いったい今度は何の研究じゃ。」

一馬は、面倒臭そうに言った。

「皆には説明してもわからん。けど、ばあちゃんとは今生の別れになるかもしれ

ない。」

一馬の母シケが目を吊り上げて怒ったのは言うまでもない。

時は、一九五二年、ハナ 十三歳の春の始まりの頃だった。

< 四 >

家を離れて小一時間ほど来たでしょうか。

農協で借りた耕運機に荷物を満載に積んだ大きなリヤカーを二台つなげて、これ

をお母さんが運転しています。

その少し前をお父さんと春雄くん、少し後ろを大きな息をつきながら、私が歩いて

て追いかけます。

完全に人気のなくなった山奥。

四ツヶ岳と禿山の間の道がちょうど峠にさしかかったところで、お父さんは止ま

りなさい、と言いました。

「ウメ。春雄。おまえたちはもういい。リヤカーをはずすから、これを置いて、

二人は耕運機で戻りなさい。しばしの別れだ。」

お母さんは少し寂しそうに俯いていましたが、二人は、言われたとおり、リヤカ

ーと私たちをおいて、峠を今歩いてきた方向へ下って行きました。

お父さんの目は、今まで一度も見なかったことのないような、子供のよう

な輝きをして
います。

そこから先は今まで来た道よりも急な坂で、谷に吸い込まれるように下っていきま
す。

その谷の向こう、前方には大きな山の峰が二つ並んでいました。
さらにそのすぐ先、峰の間に、もう一つ、大きな丸い山が見えます。
こんなところまで私は来たことはありません。

完全にお母さんと春雄くんが見えなくなるまでしばらく待って、お
父さんはポケ

ットから小さな平板のような石を取り出しました。

鉛筆の先でその石の表面をちょこちょこいじっていたとき、目の
前の景色に異

変が起こりました。

かなり離れていても、峰と峰の間の山の木々が、地震を起こしてい
るように激し

く揺れ動いているのがわかります。

そして、さらに大きく山が盛り上がったと思うと、表面の木々が土
と一緒になっ

て両側に滑り落ちていきます。

いえ、滑り落ちているのではなく、山に乗ったまま山の表面が
盛り上がって

いるだけでした。

木も土も真横になっっているのに全然その形を崩しません。

そこからは、信じられないほどの大きさの円筒形の建物のようなも
のが徐々にあ

らわれてきました。

私は自分の耳が聞こえなくなったのだと思いました。

無理ありません。

あんな大きな山が動いているのに音一つ聞こえてこないからです。

表面が少しピンクがかった輝く銀色で、眩しいほどの白い光を放っています。

その建物は酒樽をもちよつと細長くしたような形をしていて、高さは両側の山と同じくらいです。

そんな大きなものが、こんなところに建っているのです。

私は、目の前の光景、いえ、風景が信じられず、声も出せずにいました。

お父さんは、ゆっくりと言葉を発しました。

「測量で、一番下のところの直径は二八五・三メートル。真ん中の太いところで

三一三・二メートル。高さは八二五メートルちょうどだ。」

そう言われても、比較するものは私には山しかありません。

「あれは建物ではない。自分で動く機械だ。ウサギ。さあ、行こう。もう危険はない。」

段々と近づいて行くにしたがって、私は首が上に向いていきました。とうとう空が見えなくなりました。

こんなに大きな『もの』は見たことはありません。

表面から出ていた眩しい光は、いつの間にかその方向を変えていて、真上に向か

っていました。

どこが入口かわかりませんが、白衣を着た男の人が手招きしている姿を見て、そ

の辺りから建物、いえお父さんが言う機械の中に入れるのだと思いました。

「ウサギ。こつちへ来い。紹介する。」

お父さんは私を呼んでその白衣の人の近くまで導きました。

「彼は物理学を専門に研究している。まだ若いが、最高に頭が切れ

る。昨年の春

から研究所を手伝ってもらっている。」

「はい、こんちわ。羽柴です。兄が研究所所長をしてるんです。私はその手伝い

をしています。よろしくね。」

年のころ、三〇歳代前半に見えるその男の人は、頭が最高に良い、と言う割には

かなり軽い感じがします。

私はぺこりと頭を下げて、「ハナです。」と言。

お父さんが言いました。

「ウサギは私の愛娘だ。よろしく頼む。」

「はい。ウサギちゃんね、」

やっぱり軽い。（聞いてなかったの？私の名前はハナよ。）

「あの、私、名前はハナです。」

「あっそう。でもウサギでいいよ。ははは。全然問題ない。ウサギで。」

（ムッ。『ウサギでいいよ。』？なに勝手に決めてるの？しかも今度は呼び捨て。

ひょっとして私はウサギ顔？『ウサギ顔説』がやっぱり正しかったのかなあ。）

<四>

三人で最初にその設備に入ったところは、三畳ほどの納戸くらいの部屋でした。

もちろん、周りが壁に囲まれて、中には何もなくなるとしていま

す。

ひとりでに引き戸が閉まり、一瞬揺れたかと思うと体がぐぐつと重くなり、私は思わず床に手をつきそうになりました。

体がもとに戻って数秒ののち、今度はふわっと軽くなって、またひとりでに引き

戸が開きました。

出たところは絶壁で、下は大きな谷底のようになっていました。

絶壁や谷底といっても、もちろん屋外ではありません。天井もあるし、かなり広

い壁に囲まれた屋内です。

谷底は蜂の巣のような低い壁に区切られ、全部の広さが学校の講堂くらいの空間

で、壁は計器だらけでした。

父が言いました。

「これらの、設備の中の記号とそれが意味する内容については、いくつか疑問点

もあるが、ほとんど完全に解読した。

疑問点の筆頭は、この設備を誰が作ったかわからないことだ。

このことに関して、注意を要する点がある。

少なくとも記号は特殊な暗号のように容易に人に知らせないことを目的にしたも

のではない。

思考が非常に複雑な割に解読が簡単すぎるからだ。

一つの仮説を立てると、次々と解読が可能になっていく。このような無防備な暗

号は考えられない。

また、『量』を示す単位は、全く我々の生活環境に合致しないが、二進法で簡単

に読める。

暗号ならば、乱数を複雑に組み合わせるのが初歩中の初歩であって、二進法だけ、などという手抜きはあり得ない。

以上の理由から、これは敵を欺く戦争とは関連性がないこと、との心証を得た。」

一体、何の事を言っているのか、お父さんの話が私にはほとんど理解できませんでした。

お父さんが私を連れてきた理由が何となくわかったような気がしました。

尋常小学校で、私は常に皆の規範となっていたことです。

ところがそれはお父さんの大きな勘違いでした。

私はお父さんの考えるほど優秀ではありません。

戦時中の国民学校で、私はほとんど学習をした覚えがありません。

最初に疎開してきた私たちと同じ小さな子供達も、終戦前に疎開してきたお兄さん

んやお姉さん達も『学習』とは無縁でした。

私も同じです。

ただ、私の『国』を愛する心が強かっただけで、優秀な子供と位置付けられたのです。

『国』という実体のない『化物』に国民の皆が踊らされていた時期でした。

『国』を敬う気持ちは、決して失うべきではないし、今もその気持ちは失いません。

(でも、『国』は『民』から成り立つもの。)

戦前に生まれ、戦争が終わって最初に私が考えたことです。

それを知るのに、私たちはあまりに多くの時間と犠牲をかけすぎてしまったのだ
と思います。

私はそんなことを考えるだけの子。

（心の中で戦争が続いているお父さん。私に期待するのはいいけれど、私はそれに何も応えられない。

ごめんなさい。お父さん。）

<五>

武嶋一馬も助手の羽柴も、誰がこのとてつもない設備を作ったのかはわからなかった。

ただ、この設備で『何をしようとしていたのか。』は、記号と設備の『計器』が発する光の周波数の変化によって理解することができた。

この設備は動く。この仮説は、完全に有効。

そして、空間を移動する。これも完全に有効。

動くための原動力は、単純な酸化燃焼や、核融合・分裂反応によるものではない
ようだ。

二人の研究者が、動力の源泉が何であるかを想像することのできる材料すらなか

ったが、そこから得た推進力をもたらすものは、何らかの電磁的なエネルギーに

変換される、という仮説は他の仮説と決して矛盾しなかった。何かを動力源とするエネルギーが、あらかじめこの設備のほぼ中心に貫かれてい
る、黒く丸い柱の中に蓄えられていて、電磁的なエネルギーを小出しにして推進
することは疑いの余地がない。

ここでもう一度。この設備で『何をしようとしていたのか』、という話にもどる。

その答えは、この設備の最も高いところにある丸い部屋の中で、光の発する周波数によって明らかにされた。

その光は、こちらの反応によって違う周波数を発信する。つまり、応答するのだ。

正確に言うと、『光』がこちらに応答するのではなく、『光』が逆にこちらに質問してきて、こちらがそれに応答する。

何故そのような質問をするのか、ということを考える方が、こちらから質問する

よりも、答えを得るためには遥かに近道であった。

『光』の質問者は、そのとき誰かが応対しているのではなく、あらかじめ機械的にパターン化された質問であることは感じられた。

そのことは、この設備に相当高度な記憶能力とパターン制御回路が持たされていることを意味しており、果たしてこの設備を作ったものが何者なのか、二人の研究
者に一層の興味を抱かせることになった。

最初この『光』に出会った二人の研究者は、いくつか質問されると、その質問の

解読にほぼ一カ月をかけた。

しかし、たとえば、使う言葉の違う異国の人間同士が、互いの言語を理解するよ

うになるよりずっと早く、『光』の言葉を二人の研究者は理解した。語彙があまりにも少なく、仮説が立てやすいからだ

もともと、物理学に特化された専門的な語彙、つまり、物理学でしか使用しない

言葉は、多様な日常的な語彙に比べればかなり数的には少ないというものである。

助手の羽柴は物理学者であり、この場合、さらに、相手がする質問を、この設備

をどうしますか？、という類だけに絞り込めたため、なお想定される単語は少なくなってくる。

結果的に最も頻繁に交わされることになった単語は、『一光速』いちしつそくであった。

これが理解できれば、設備の移動する速度は簡単に会話できる。

『一光速』は一秒間に、二九九七九二・四五八キロの完全な定速度の共通語だ。

二人の研究者は、『光』がしてくる質問の内容から、大きな仮説を導き出し、背

筋の凍る思いをした。

この設備を作ったものは、もしかして地球上の誰かと違うのではないか、という

仮説。

その仮説は決して証明することはできなかった。

しかし、その根拠は希薄ながらも、ある強烈な状況証拠に支えられ

ていた。

つまり、その『光』は、物理学に充分すぎる知識を有している割に、肝心のこの

『地球』のことをほとんど知らないことに気がついたのだ。

正確に知っていたのは、地球の重力加速度だけ。

しかも、その重力加速度は、設備が設置してある地点のものであり、地球上のプ

ラスマイナスの尤度も考慮されていない。

これは、測定によって得られた知識であることは明らかであり、あらかじめ記憶

されていた知識とはいえない。

地球の直近の第一恒星すなわち太陽と、第二恒星ケンタウルス座アルファ星につ

いては、二人の研究者が調べたものより遥かに詳しい内容を把握していたが、

『地球』についての知識は、地球の自転の周期、太陽に対する公転周期すら教え

てあげないと知らないような、最低な知識の状態だった。

約四カ月という『光』とのやりとりを経て、最終的にその『光』は、

《《《あな

たの指示に従い、次のようにします。本当にこれでよろしいですか？》》》と確

認を求めてきた。

その概略内容を、地球上で使用される言葉に置き換えると、次の通りである。

なお、数値は一部概算表記である。

・地球時間の一〇三六八〇〇秒（十二日）後に乗務員の出航確認を行い、『はい』。

『であればその八六四〇〇秒（一日）後に出航し、『いいえ。』であれば出航を停止し、乗務員を解放する。

・ 出航確認より帰還確認まで、出航確認時の船内大気成分及び大気圧・気温を常に保持する。但し、乗務員による船内操作はこれに優先する。

・ 出航時重力加速度は大気圏脱出に必要な最低限とする。

・ 大気圏脱出後の軌道は、直径〇・六二六一七一二光年の完全な円形軌道を一周回し、地球に帰還する。

・ 周回軌道では、重力加速度を常に1gに保ち、それを超えたり、満たさなかつたりしてはならない。

・ 周回軌道では、1gで加速し、三〇五四七三九五秒（〇・九六八六五二年）間航行する。

・ このとき、設備は亜光速（光速の九九・九二五％）に達している。
・ その後、亜光速で三一五三六〇〇秒（〇・九九九三一六年）間、定速航行する。

・ 定速亜光速航行時、設備は回転により、重力加速度1gを保持する。

・ 定速亜光速航行後、1gで減速し、三〇五四七三九五秒（〇・九六八六五二年）間航行し地球に帰還する。

・ 帰還後乗務員の帰還確認を行い、『はい。』であれば開放し、『いいえ。』であれば、再び出航確認を行う。

わかりやすく一言で言うと、地球を出て、約一年間加速を続けて、

光速の九九・九二五％に達し、そのまま約一年間航行、今度は逆に約一年間かけて減速し、地球に帰還するという、約三年間のとてつもない航程だ。その間の円形軌道は、約二光年、直径約〇・六光年というから、光の速度で七ヶ月以上かかる距離あたりまで離れて行ってしまふ、ということだ。

この設備は、搭乗者にとんでもない速度での宇宙旅行をさせようとしていることはわかったが、その馬鹿げた宇宙旅行は、一体何の意味があるのだろうか。

二人の研究者は、亜光速で一年間走行することの意味がよくわかっていた。

最初の加速は、〇・九六八六五二年。この間、設備の外、つまり地球上の時間は、

一・一五四四二二年経過する。

次の亜光速（光速の九九・九二五％）での一年間。この間、地球上の時間は、な

んと二五・八二四七年経過する。

そして、減速時の〇・九六八六五二年。これもやはり加速時と同様に、地球上で

は一・一五四四二二年経過する。

地球を飛び立って、設備の中の時間は約三年間、その間の地球で経過している時間は約二八年間である。

二人の研究者にとって宇宙旅行はこの上ない楽しみだったが、この設備が、搭乗

者に与えようと意図しているらしいこと、つまり、時間を超えるこ

と、未来に旅
する可能性の方が遥かに魅力的だった。

<六>

荷物の積み込みは、七割方、私が行いました。
残りの三割は父です。

米と缶詰、そして何より研究所の書籍が重くて最悪です。
その量も半端じゃありません。

しまいには、私の腰は、しけおばあちゃんのように曲がっていました。

もう一人の男性、羽柴さんは、一人でぶつぶつ言いながら設備の中
を上下する小

さな部屋で行ったり来たり。

姿が見えなくなったと思うと、一番上の部屋で本を読んでいます。

「羽柴さん。少しは運ぶの手伝ってくれませんか？」

「おう。ウサギか。」

「せめてこの書籍を奥へ持って行ってくれませんか？でないと、他
のものを運び

入れられません。」

「おう。ウサギ。」と本に目を落とす羽柴さん。

「。。。。。」（完全に聞こえていないふりだ。）

手招きをするので、ちょうどいい、耳の横で同じことを繰り返して
やろう、と目

を吊り上げて私が近寄ると、

彼は「どうも腰が入ってないなあ。」と言いながら、私のお尻をつ
かんで軽くひ

ねり上げました。

私は、羽柴さんの腕を抱え込み、噛み付いていました。

「。。。。。」

私はじつと噛み付いたまま彼の顔を上目使いに見ます。

羽柴さんは、しばらく無言で目を閉じていました。

「うーむ。ウサギは噛むか。なるほど、そうであったか。で、私は何をすればいいのかな？」

私は、噛み付いたまま言いました。

「ふが。ほへきをはほひなはい。いまふぐ。ふえんぶぼ。ああ。書籍を運びな

さい。今すぐ。全部よ。」

私たち三人の生活をする場所は確保されました。

計器だらけの谷底の講堂を一階とすると、二階は回廊に囲まれた部屋で、中は薄

暗く複雑に階段が入繰んでいて、人が生活することはできません。

その上が三階で、一番広い部屋があります。

やはり回廊に囲まれた部屋ですが、回って数えてみると四九個の扉がほぼ等間隔

にあります。

その扉を開けて中に入ると、中心にあるガラスのようなもので幾重にも囲まれた

黒く丸い柱以外、そこには視界を妨げるものは全くありません。

凹面の丸くなった壁から真ん中の柱をはさんで反対側の壁まで、三百メートルく

らいある広い部屋です。

父の話によると、壁にある四九の扉と扉の間は、一階の計器場もしくは、部屋に

個人の目の玉を登録して、その認証で自由に天井までの『つい立て』のようなものを設定して作ることができるといいます。

扉の内側左脇の大きな丸い回転する舵のようなもので、それぞれの部屋ごとに都

度部屋の光る天井の明るさを設定できます。

また、天井には、各仕切りに一つづつ、換気口のようなものがついています。

部屋の中では、一・五センチ間隔くらいで下から自由な高さに床を上げて、仕切

りや平面を自由に設定できます。

逆に高さをマイナスにすると、穴になって深さは約六〇メートル位まで下げられます。

何か『もの』を出してもらつことはできませんが、すでにあるものを消滅しても

らつことは簡単にできるそうです。

一度消滅したものは、今のところ、二度と復活できないというので、この機能は、

安易に利用しないよう父に言われました。

各扉の内側右横には、訳のわからない供給口が二〇個、二列で縦に並んでいます。

供給口には専用の管のようなものを取り付けて供給を受けることができるそうです。

専用の管のようなものは、二〇本づつあって、それぞれ、液体・気体・原子・荷

電粒子・電磁波と父の自慢の美しい字で書いてあります。

父が一階の計器場で設定したという供給口は、気体が三種類。

温度を十八 に設定した地球の大気、単気体の酸素、窒素。

液体が三種類。

十 と六〇 に設定した真水、塩分を含んだ十 の水。
電磁波が二種類。

これは私にはよくわかりませんが、父は調理をするときに使用する
と言っています。
す。

簡単な調理は私の役目だそうですので、あとで使い方を教えてもら
うことにしま
す。

それ以外の供給口は、絶対にその場では動かすことができないとい
う蓋がされて
います。

変な機能ばかりですが、何だか充実した感じの設備。

きつとこれは個人個人の生活の空間や、共同の空間が確保できるよ
うに配慮され
たものだと思います。私は妙に感心しました。

つい立てで仕切っても、一部屋が片方の壁の幅二〇メートル、高さ
も約二〇メー
トル、奥行きが百五〇メートルありますから、かなり大きな部屋に
なります。

ただ、入り口の壁の反対側は扇状にほんの少しづつ狭くなっていつ
て、かなり遠
くに見える百五〇メートルくらい先のところは一メートル弱ほどの
幅になってい
ます。

そのあたり、ちょっと違和感があって、目の錯覚をよび、とてつも
なく遠くに見
えます。

慣れるまでには、大分時間がかかりそうです。

父の部屋は『エレベータ』という納戸から一番近い『一番』の部屋。羽柴さんは彼が好きな数字の『八番』の部屋。（二番から七番までは仕切りを作
りません。）

羽柴さんが『八番』なので、意地悪く私はその正反対の『三二番』にしました。

女子トイレは私の隣の『三三番』、その隣の『三四番』が女子風呂場。

男子トイレは父と羽柴さんの間の『五番』。その隣の『四番』が男子風呂場。

私の部屋から比較的近い『三八番』が保管庫、『三九番』が厨房、その隣『四〇

番』が食堂、さらにその隣の『四一番』が共同の居間。

その隣は『四二番』で縁起が悪いので跳ばして、『四三番』が図書室です。

『十三番』から『二四番』までのほとんど直角に近い広い扇形部分が運動場になりました。

羽柴さんは、別に海水浴場を作ろうと提案しましたが、二対一の多数決で、即、却下されました。

一つ、先に伝え忘れていたことがある。

部屋番号は、物語を把握する上で、ほとんど関係がないことである。

私が思うに、結構大きな問題がありました。

それぞれの部屋が離れてしまったので、何かあったときの伝達が不便なことです。

父によると、設備の中は『電磁波』だらけであるにもかかわらず、この設備は

『電磁波』を発する機器の持ち込みは、どんなに微弱なものであるうとかたくな

に拒否しているため、戦時中使用していた無線の類や電源は一切使用できないらしいのです。

私は、父に電磁波に依らない伝達の手段を教えてくださいました。

それぞれ持ち込んだ時計を頼りに、毎朝八時に扉から一番離れた中央の黒い柱を

取り巻く透明な柱に耳を当てて、モールス信号を叩き言葉を交わすことになりました。

それから、私は父に最上階の部屋へ連れていかれ、設備との交信の仕方を教わりました。

『教わりました』というと、まるで本当に教わったみたいですが、事実を正確にいうと、『父は教えました』です。

確かに父は教えました。が、実は私は、ほとんど教わっていません。最上階の部屋には、さまざまな形をした機械と管のようなものがありました。

私が興味を持ったのは一つだけ。部屋の天井近くにある四つの丸い窓。

そこには鏡のようにこの設備の回りの様子が映っていて、まるでそこに木々や草

花があるように風に揺れていました。

<七>

とうとう私たちの出発の日が到来しました。

設備一階の中、壁の高いところにある、大きな信号盤が二つ。

左側はきらきらと光が発しているだけ。

右側はよく見慣れた時計と、その下に1952 04 10、現在日付け。

その下には、00-00-00-00-00-01-13,12,11・

・。秒読み

カウンタ。

私と羽柴さんは、一階のソファーのようなものの背中に、荒縄で体をくくりつけ

られていました。

私たちをくくりつけた父は、歯を使って自分の体を器用にソファーにくくりつけ、

出発の時を待ちました。

秒読みの一番右側の数字が『0』になった瞬間、『ブン』、と大きな音が一回鳴りました。

私の体は強烈にソファーに押し付けられました。

お腹と首がかなり痛い。しかもどんどん痛みがひどくなる。

「痛い。痛い。やだやだやだやだやだやだやだー!」

私は足をばたばたさせて、夢中で叫んでいました。

しかし、横揺れはもとより、振動や音は全くありません。

その場の『絵』としては、シーンとして停まっているみたいです。その差が信じられません。

ただ、お腹と首はどんどん痛くなるばかりです。

真ん中の黒い柱が、鮮やかな青紫色になっていました。

しばらくすると、急に体が軽くなって、出発する前と同じ状態になりました。

（助かった。）

隣の羽柴さんを見ると、顔から汗が吹き出て流れています。

「熱圏（大気圏の切れ目）を脱出した。」父が言いました。

父は自分で縄をほどき、私たちの縄もほどいて、

「ウサギは三階の41（居間）に行って待っている。私と羽柴君は、最上階で首

尾を確認してくる。」と言いました。

私は、二人が先に『エレベータ』に乗って行ったあと、変な声？を遠く耳にしませんでした。

さかりのついた猫のような声。

わたしはそれが一階のどこから発せられていると思い、耳に手を当てて方角を

探りました。

声のする方へ次第に近づいていき、とうとうその声の主が何であるかを知りました。

オギヤー、オギヤー。

（赤ん坊の声だ！）

記録機のような機械の裏、覗き込むと赤ん坊が仰向けになって泣いていました。

驚いたなんてものではありません。

（ちよつとう。。なんで？いつ誰が赤ん坊を置いていったの？）

その赤ん坊は、少し色が黒く、目の色もやや茶味がかっていて日本人ではないよ

うな気がしました。

赤ん坊は裸だったので、男の子であることはすぐにわかりました。私が抱きかかえると、きよとんとして泣き止みました。

（あなた。やめてよね。今更もう戻れないのよ。いったい誰が育てるわけ？）

生まれてさほど経っていない感じでしたが、瞳がこっちを向いている。

その瞳。ちよつと心くすぐられる。

何だか、可愛い。

とっても可愛い。チュチュ。私はたまらずおでこにキッスをしました。

父と羽柴さんが居間の『四一』に戻ってきたとき、私は赤ん坊を抱いて揺らしな

がらうろろうしていました。

その姿を見た父は動転の極致でした。

「お、お、おまえ。ウサギ。それはなんだ。何をおまえは持ち込んだ。」

（赤ん坊を持ち込んだ？有り得ない話。）

羽柴さんは妙に落ち着いて、「武嶋さん。娘さんはもう子供じゃないんですよ。

ははは。」

「母だと？な。な。何のことだ。は、羽柴君。」

私は、意識して冷静を保ちながら、赤ん坊をテーブルの上に置いて、

羽柴さんに

近づいて行き、羽柴さんの横つ面を叩きました。

「私は子供です！」

羽柴の奴は、いえ、羽柴さんは、「ウサギ。なんだよ。痛てーよ。

冗談だよ。冗

談。」と叫びました。

さらに、羽柴の馬鹿は、いえ、羽柴さんは、「ウサギ。君が産んだ

んなら、なお

面白いなーつと。」

(私は卵を産む『ニワトリ』かい!!)

ちなみに私、現在、十三歳と九ヶ月。母は十六歳の終わりに私と春

雄くんを産ん

だと聞いていました。

<八>

設備は、重力加速度一gが保たれているので、航行中、宇宙空間ながら設備内の

重力は地球上と全く同じである。

一言で簡単に重力加速度一gを保つ、というが、このことは、亜光速の定速航行

まで、約一年間、秒速九・八〇六六五メートルずつ(一秒間に時速約三五・三キ

ロメートルずつ)速度を増しながら進むということ、常識的に考えれば、加速

推進力を与えうるいかなる原子反応であっても、設備内にもともと、太陽のよう

な『恒星級』のとてつもない質量源がなければ到底実現不可能なこ

とである。

『恒星級』の質量の物体に加速推進力を与える動力源は、当然に『恒星級』の質量源では足りる筈もなく、理論は『あり得ない』という地球に住む人間たちが最も好む、『パロドックス（逆説）』につきあたる。

発想を転換してみると、その設備の動力源は、加速推進力に直接置換えられるも

のではなく、全く別な加速推進力を得るための『動力を受けること』または、

『動力を誘発すること』に全て消費されると考える方がまともな理論になる。

すべての正論を無視して、身の回りの例でわかりやすく言うと、設備内の動力源は、いわばトランシーバーの子機の電源のようなものである。

では、別な推進力とはいったい何か。

宇宙空間はほとんど真空であるが、『真空イコール何もなし』、と考えるのは、宇宙広しと言えども、おそらく地球上に住む人類だけである。美しい地球に住む知的生命体、すなわち人類は、とても魅力的で稀有な存在である。

地球を除く、私たち、大抵の知的生命体は、地球上の人類よりも大抵五千万年か

ら一億年ほど前にその知性を得るべき進化を遂げているから、逆に現在の地球の

人類よりも五千万年から一億年進化した状況にある。

私たちは、真空の中に、エネルギーを発生したり伝えたりする源が『敷き詰めら

れ』ていることを誰でもが知っている。

たまたまある一定の時間帯だけを捉えれば、それが突然に発生したり、消滅した

りしたように観測できるが、時間と空間の座標を四次元立体のようにとつてみる

と、それが真空の中にびっしりと敷き詰められてことがよくわかる。地球の人類は、過去さまざまな仮説と実験観測によって真実に近づきながらも、

最後はいつもあきらめてしまつて、真空の中に存在するエネルギーの源に気付く

ことがどうしてもできない。

それがいったい何故なのか、何故気づいてくれないのか。

今の地球の人類は、よほど頭が凝り固まつてしまつていて、もしかしてこれ以上

の進化を遂げずに滅んでしまうのではないか、と私はただただ恐れる。

類に風を受けて、あつと言う間に、空気存在に気付くことのできた地球の人類。

これは、とつともないことである。

そのことに四百万年以上を費やした我々より、地球の人類は信じられないような

大きな資質を持っている、と私は信じて疑わない。

ものを数え始めた時もそうだ。

『零』という概念を、あつという間に発見し、理解することのできた地球の人類。

とつともない魅力を、私は彼ら地球の人類に感じている。

これはもう理屈ではない。『魅了されている』、と言つた方がいい

かもしれない。

進化の過程の時間をどんどん縮小していく地球の人類。

もう彼らに触れずに、彼らを構わずにはいられない。

そう感じるのは私だけであろうか。

かつて知的生命体の発生する確率が極端に少ない地球に失望し、隕石を投下し、

当時の生命体を滅ぼしたのち、なおかつ現れてきた知的生命体、すなわち人類の

存在を確認し、どれほど驚愕したことか。

だが何と言おうとも、そのときの忘れかけた『驚き』と『感動』を私たちは決して忘れてはいけな

いと考える。

私たちはこの稀有な地球の人類を滅ぼしてはいけない。

この種のあり得ない偶然の賜物は宇宙の宝ものに等しい、と。

彼らは今、進化の術を完全^{すべ}に失い、停滞しているが、彼らだけは宇宙の

財産として絶対に滅ぼしてはいけない。

私たちは、少し落ち着いてきたので、設備内の他の階も探検してみることになりました。

生活空間である三階の上、一階上といっても五、六メートル上のほうですが、

その四階にあたるところの一番奥の部屋、・ちょうど小学校の教室を三つくらい

つなげた広さの部屋に入ってみました。

そこは、今のところ唯一、設備の外を観測することができる空間でした。

地上にいたとき、一度その部屋に入ったことはありますが、空間は薄暗く、なお

かつ真つ黒な壁にふさがれていたので何も興味を持ちませんでした
が、今は違います。

真つ黒だった壁は、厚い透明のガラスのようなものになっていて、そこは縦二

〇メートル、横四〇メートルの大きな『動く絵』のような感じでした。

しかしそれは何かに映し出されたものではなく、明らかに設備の外、すなわち宇

宙空間を見せてくれるものでした。

私は、星の散らばった空間をこんな立体的に見たことはありません。

設備はすごいスピードで航行しているため、近くの星は一気に上から下へ、遠く

の星はゆっくり上から下へ流れていきます。

私はこれが、空間を立体的に見せている単純な原因だと気づきました。

地球を出発して早一週間。

その間、私は、三度の食事のしたくと赤ん坊のおむつ替えと洗濯ばかりしている

ような気がします。

おむつは当然持ってきていませんので、替わりの手ぬぐいが大活躍です。

缶詰は沢山用意しましたが、毎日三個ずつ食べていると、たった四ヶ月で底をつ

きます。

ですから、これは一週間に一回だけにして、あとはいわゆる『猫まんま』であったり、混ぜご飯だったり、お米を中心とした単純なもので皆のお腹を満たしました。

おかげで、混ぜご飯は十種類くらいできるようになりました。干し魚を焼くのは、十秒くらいです。

芋をふかすのに至っては、約三秒です。

五〜十秒放っておくと、たちまち粉になります。

これをお湯に溶かして塩で味を調べると、いい感じの汁物になります。

「ビーン、ビーン。」また、赤ん坊が泣いています。

ミルクも哺乳瓶ありませんが、豆を粉にして煮詰めるところを喜んで飲みます。

ちゅぱちゅぱ。ちゅぱちゅぱ。

夢中で飲む姿が本当に可愛い。

地球を出発してもう半年が経ちました。

四階の奥の間で、夕食のあと皆で星を見ながら地球のことを語り合ったりするの

が、日課になっています。

私はいつも赤ん坊をお腹に抱いていて、そこでは宇宙の空間を見せています。

そう。その赤ん坊には名前がありません。

最初に赤ん坊を見つけて、居間の『41』に戻ったとき、部屋の時計が鐘を打つ

たので、『鐘鳴』（カナル）と名付けました。

鐘鳴は、目を皿のようにして宇宙の空間を見えています。

設備のスピードが相当増してきたのか、もう宇宙の空間にある星は、星ではなく、

距離に応じてさまざまな長さの帯になってしまっていて、短冊のよう
に縦に垂れ

下がっています。

それはそれでまた格別に綺麗な光景で、今日は比較的近くの大きい
星は色が赤い

ので、真っ赤な帯が細い無数の白い帯に色を混じえ、ところどころ
桃色に輝いて

います。

（あと二年半かあ。）

そろそろため息が出る時期になってきました。

そのあと、三人で相談して、これからは、四季を作っていく、と
いうことにな

りました。

四階の外、宇宙の空間の景色は、とうとう完全に真っ白になりました。
た。星も短冊

も見えません。

地球を出発して三五三日目。

設備内に異変が起きました。

私は、自分の部屋で、鐘鳴と一緒に寝ていました。

出発のときにしたようないやな音。『ブン』という大きな音がしま
した。

部屋の先の先、設備の真ん中を貫いている青紫の柱は、黄色く輝い
て、そのあと

真っ赤になりました。

設備全体の力が急激に落ちている、子供の私にもそんな感じがわかりました。

気持ち悪くなりそうに周りが段々傾いていくように感じました。体が浮く。上も下もわからない。

そしてとうとう私たちはドアのある壁の方にゆっくりと落とされていき、途方に

くれました。

例の柱は遙か一五〇メートル彼方、今では頭上にあります。

縦と横が逆になってしまった。どうしよう。私と鐘鳴は壁の上に座っている。

物音もしないし、揺れや振動もありません。

私がべたつと座っているとところの下は壁の扉でした。

その扉を下から『ゴン』と叩く音が聞こえました。

扉をよけてこれを開けると、下にはお父さんが居ました。

「おい。ウサギ。大丈夫か。怪我はないか。」

お父さんはその後、壁と床が逆になってしまった回廊の壁を歩きながら、『八番』

の羽柴さんの部屋へ行き、そこへ入って、いえ、厳密に言うと、その扉によじ

登って入って、打ち合わせをしました。

「亜光速の定速度航行に入った。最初の大気圏脱出の速度を羽柴君が珍しく間違

えて、丸二日ほど勘違いしていた。

これからは加速度重力は設備の回転によって得るので、縦と横が逆になる。ずっと

と一年間だ。」

(えええええー？聞いてないよ。そんな大事なこと。)

「つまり、二〇メートル四方の壁、ここが床だ。一年間。とりあえ

ず床、いや壁
を上げて、いや、出して、各部屋、階段と天井を作るがいい。今度
は、何階建て
にも部屋ができるぞ。ははは。いいだろう。」
全面的な模様替えです。
でも模様替えというと、部屋は変わらないのですが、壁と床が逆に
なっただなん
て、普通の感覚では考えられません。
「ごちゃごちゃ言わず、風呂場や厨房をどうするか考える。ぐちゃ
ぐちゃになっ
てるぞ。糞尿がちらばってるかもしれん。」
ごちゃごちゃどころか、私は何も言っていない。
ただ、顔がごちゃごちゃ言っていたのかもしれない。
私の口はかなりとがって突き出ているのが、よく自分でもわかりま
したから。

<九>

地球への帰還はあと少しでした。
遙か懐かしい私たちの故郷、太陽系にすでに入ったそうです。

三年目に入った後からは、設備全体は、縦と横が、出発後の最初の

一年の状態に
戻っていました。

ただ、四階の奥の観覧室の大きな『動く絵』のような窓から見る星の進む方向が
逆で、星たちは下から上へざーっと流れていきます。

羽柴さんは、設備が一年前から減速状態に入ったので、重力加速度の方向を出発
時に合わせるため、設備の前と後ろが逆になっているのだ、と言いました。

また、私には訳のわからない話ですが、お互いに面倒くさいので、私はうなずく
ことにしました。

大きな『動く絵』のような透明な窓の前に立って足元から下を見ると、進行方向
に足の方から吸い込まれていく感じで、上の方へ進んでいたときよりもずっと宇
宙の深さを実感できます。

羽柴さんがその下の方を指差し、「海王星だ。」と言いました。
無数の星たちよりもずっと近いところにある海王星がゆったりと動いているのを

見て、設備の航行速度は極端に落ちていることを感じました。

「太陽まであと四五億キロくらいだ。既に着陸態勢に入っている。設備の速度は、

今ではだいたい音速の二万八千倍を下まわった。一番早いときの三パーセント程
度だ。」

「よくわからないけど、あと何日くらいで着くの?」

「このままずっと1gの重力加速度で減速していくと、ちょうど十日で太陽の

辺りだ。」

「そんなにかかるの？」

「馬鹿。文献にある、ロケットでも音速の二〜三〇倍くらい。それでもここまで

来るには、十数年かかる距離だ。」

（訳わからないことばかり言う奴。本当にいらいらするわね。）

「太陽に戻るんじゃないの！じゃなくて地球は？」

「地球は今、太陽の向こう側だ。ここからの距離で比較すると、地球は太陽のす

ぐ真裏側にいるイメージだ。

ただし、太陽のすぐ近くは通過できないから、帰りの軌道はぐるっと回るんだと

思う。ちよつと想像がつかない。

それは今まで通り、設備に任せることになる。」

そう言われても、ますます私にはわかりませんが。

（結局、あと何日で着くか、よくわからないってことですよ。）

真横を通過していく海王星。綺麗な青いシマシマ模様でした。

私と鐘鳴は、太陽系に入ってから、食事と入浴以外はこの観覧室にいて、寝泊り

もここですることになりました。

何日か経った朝食の後、いつものように四階の観覧室に入り、私はびっくりしました。

下の方から、ものすごく大きい星のようなものが半分顔を出しています。

羽柴さんは、「木星だよ。」と言いました。

こげ茶色と白のシマシマ模様がさらにドンドン近づいてきました。

そのあと、間違っつてぶつかってしまつのではないかと思うくらい、すれすれに進

んでいきました。

三年間の中で最も揺れたのがこのときです。

少し横に揺れて、『ブン』という例のいやな音がしました。

私は「きゃっ」と言っ、足につかまって立っていた鐘鳴を抱き上げ、その場にうずくまりました。

設備はそのあと何事もなかったかのように『しらばっくれて』、木星を離れていききました。

また何日か経ち、小さな星屑のような岩石のような星の間を器用に縫いながら、

とうとう太陽が近づいてきました。

でもちつとも暑くはありません。

羽柴さんは地球は太陽の向こう側、反対側にある、と言っていました。

私は未だ見えないその姿を想像して、思わず涙が出そうになりました。

突然、目の前の透明なガラスのような窓にいくつもの格子網がカーテンのように

重なって張り付いてきて、部屋が薄暗くなり、そのまま太陽の横を通り過ぎました。

羽柴さんは、木星は地球の直径の十倍以上、太陽の直径は、そのまた木星の十倍

くらい、と言っていました。

そのとき通り過ぎた『横』は、実際にはかなり離れていたのだと思います。

太陽はその大きさの割りに、そんなに大きく感じませんでしたから。

すぐに燃えるように金色に輝く星が見えてきました。

「水星だ。」と羽柴さん。

窓の格子網がなくなつて、その奥の左の方で、怪しく白い光を放つ星。

「金星だよ。これはおもしろい。偶然に、水星・金星・地球がほぼ重なつてる。」

その金星のすぐ後ろに地球が見えてきました。

まったく色が違い、美しい青色に輝いていましたので、それだとすぐにはわかりませんでした。

（まるで宇宙の宝石だ。地球は。）

真横には遠く小さく黄土色の星が見えます。

それを指差して、「火星だよ。」と羽柴さん。

「近いといわれている割に、意外と離れてるじゃない。」と私。

羽柴さんはあきれたように、「惑星はとまっているんじゃない、回ってるの。」

わかる？太陽の周りを。

公転の位置がずれてるだけじゃないか。馬鹿！」

（ムッ！）

地球の左側、少し手前には小さく光る丸い球がはつきりと見えます。

（月かな。小さい。でも地球に捕まえてもらつて、一生懸命なお月さまって感じ

ね。）

月が、私につかまる鐘鳴のイメージと心の中で何となく重なっていました。

「あんなに小さいとウサギが見えないね。」と私。

「月のウサギはいつも地球のほうを向いてるの。もともとこっちから見えるわけ

ないの。馬鹿二回目！」

(ムキツ！いちいちうるさいな。)

月は今の鐘鳴に似ているなあ、と思いました。

鐘鳴は気がつくといつも私の方を見ていました。(アレ？違う、逆か。ウサギは

私のほうだよね。)

段々と体が軽くなっていきます。

私たちは、三人とも、いえ、鐘鳴を含めての四人、出発した時のように一階のソ

ファーに体を荒縄でくくりつけました。

私は、設備内で初めて鐘鳴を見つけたときの日を思い出していました。

そのときを誕生日にして、あと二十日あまりで三歳になる鐘鳴の手をしっかりと

握りながら。

鐘鳴は、口を真一文字にして、その大きな目で私の方を頼るようにじっと見てい

ました。

地球を出発して、一千七百二日目。

「定刻通りだ。」と得意げな羽柴さん。

「うそばかり。到着日もわからなかつたくせに。」と私。

「こら！ウサギ！」と羽柴さん。

お父さんはいらつきながら、

「おまえら、静かにせんか。下りるときは無重力から一気に加重がかかって上が

るときよりもきついぞ。」

(やめてよ。もう勘弁よ。)

『ブン』『ブン』。等間隔の小さな『ブン』の音。たしかに設備も少し緊張して

いるみたいです。

私たちの設備は、その後ほとんど音もなく地球の大気圏に突入していきました。

<十>

私たちは、設備から外に出て、三年前に上がったときほとんど変わらない景色を目の前にしました。

私は懐かしくてたまりませんでした。お父さんと羽柴さんは、なんだかがっかりしている様子でした。

鐘鳴は、初めての光景に驚いて私の足につかまっただけです。

「荷物はひとまず中に置いておこう。まず里の方に下りていって、まわりの様子を調べることからだ。」

羽柴君。とりあえず、その山を閉じてくれ。」

『とりあえず、その山を閉じる。。。』
知らない人間が聞いたら、神の声とも聞き紛う、とても『神々しい』会話です。

三歳になろうとしている鐘鳴が、ほとんど言葉をしゃべれないのは完全に私の責任です。

私は設備の中でよく彼に話しかけましたが、絵本もない、そもそも普通の生活で

はないし、見るものがごく限られているので、ついつい話が単調になつてしまい、言葉が切れてしまいます。しゃべらないので、私の言葉を理解しているのかどうかもよくわかりませんでした。ただ、彼が私を信じ、頼っていることだけは、はっきりと感じています。

私たちは、見慣れた山々とその谷間を縫うように流れる川を左手下に見ながら、峠を下って行きました。

木々の紅葉はすでに始まっていて、道の横、少し斜面になつたころには、野生のコスモスの花が沢山咲き乱れています。

ここで、私は一つ重要なことに気付きました。設備の中の一階にある右側の日付は確か三月十八日になっていたと思います。

地上は今、秋。やっぱり違う。何かがずれている。

鐘鳴は、最初、お父さんが背中におぶって歩き出しましたが、両手を私の方へ精一杯伸ばし、しまいには白目をむいて涙をこぼし始めましたので、途中で交代して私がおぶって行きました。

彼は私の背中の上では安心したように眠っていました。道が平らになり里が近づいてくると、左の方には『羽柴数理研究所』

の看板と家

屋が見えてくる”筈”でした。

しかしそこには古びた屋敷はなく、明らかにかつて屋敷があったであろうと思われ

るような人工的な庭石と切り取られた木々の切り株のみがありました。

羽柴さんは、顔をひきつらせて、兄の家に行ってみる、と言い、三叉路のところ

まで来て私たちと別れました。

私たちの家はもう、すぐ近くです。

少し坂を上がり、私たちの庭に入ると、その家は私たちが三年前出たときと何も

変わっていませんでした。

離れの納屋もそのままです。

ただ、物を出し入れしていた当時の様子とは違い、全く使われていない感じです。

突然、子供の声が出て、庭の奥、家の裏側から二人の子供が飛び出してきました。

小学校低学年くらいの女の子と幼児の男の子。

子供たちは三人を見て一旦立ち止まり、家の中へ駆け入っていきま

した。

その直後、すれ違うように玄関から出てきた初老の女性。彼女は私たちの姿を見つけると立ち止まり、老眼鏡のようなめがねを下にずらし

てじっと見つめていました。

その表情は、一瞬驚きのそれに変わり、続いてひどく崩れていきま

した。

「あんた？ハナ？生きていた。生き返った！幽霊じゃねえ。」

私たちは意味もわからずあっけに取られて、ただ、その場に立ちすくんでいまし

た。

時は一九八〇年秋。

父一馬とその子ハナが家族と別れ、地球をあとにしたときからは、すでに約二八
年半の歳月が流れていた。

初老の女性は、当時三〇歳、今は五八歳の一馬の妻、ウメであった。
一馬は理論通りにことが進むと、約二五年、設備の外と内で時間の
ずれが生ずる

ことを承知していたし、ハナもそれらしきことをうわべで聞いてい
たが、いざ本

当に年を経た人間と会ってみると、にわかには本人と気が付くことは
できない。

また、実際に会っていても同一人物であるという実感がなかなかわ
いてこない、

というのが現実のようである。

一方のウメにとっては、別れたそのときから一馬やハナに対する記
憶はそのまま

停止していて、記憶の中で年を経ることは決してない。

ウメに複雑な事情を説明し理解させることは到底不可能であったが、
ウメにとっ

てはそんなことはどうでもいい、生まれ変わりでもなんでも構わな
いというよう

な感覚で、疑うことすら知らない。

ハナの双子の弟である春雄は、三二歳のときに、六歳年下で従妹の
美津子と結婚

し、この実家より電車で五〇分ほどの街の企業に勤めるサラリーマ
ンとなってい

る。

子供は、現在七歳の『薫』と五歳の『直樹』の二人。

広間の大きな仏壇の中には、三つの位牌が並べられている。

その位牌は、一馬の母シケ、一馬、そして八ナの三名であった。

一馬の母シケは、その後一馬に会うことなく、一昨年八五歳で既に他界していた。

一馬と八ナについては、姿が見えなくなって八年目、今から二〇年前に失踪宣告

による死亡扱いとなっていた。

皆、三年で戻ると言った一馬の言葉を信じ、ひたすら帰りを待つていたに違いない。

彼には嘘をつくつもりは毛頭なかったし、現に三年で戻り決して嘘はついていな

いが、彼を待つ人間にとっては完全に嘘をつかれていたことになるわけだ。

一馬は母シケに対し、本当にすまない、と言う気持ちで胸が一杯になった。

地球の人類は、進化を完全に停止している。

十八年前、初めて有人宇宙飛行に成功したが、宇宙に神が居たか居なかったか、

などという話がせいぜい彼らの興味を中心であり、彼らはまるで宇宙の真理を求めようとしな

その七年後、人類初の月面着陸を成し遂げたと言つが、私たちは残念ながらこの

事実を記録として確認できない。

地球の人類は、ある時期からマクロの力学やテクノロジーのみに走り、ミクロのサイエンスを放棄してしまったのだ。

『宇』と『宙』の真理、『モノ』の起源、森羅万象を司るもの、それらのすべて

に目を閉じてしまった地球の人類。

次に目を開けるのは、果たして何千年後、いや、何万年後のことになるだろうか。

しかし、そのときには、地球という温水槽が存在していないことは明らかである。

春雄には、双子の姉が二五歳も年下のハナだ、と言うような馬鹿げた話を通じる筈もなかった。

確かに春雄の記憶に残る父一馬と姉のハナは、目の前に現れた二人と瓜二つであ

ったが、母ウメが理由のいかんを問わず、二人を信じて受け入れたのに対し、春

雄はこれを受け入れることを拒んだ。

二人と別れたときの春雄は十三歳であり、当時の子供の目から見た二人と、今四

一歳となった大人の目から見る二人はその間に大きな違いがあったのかもしれない。

さらに、ハナについて言うと、別れたときの彼女は十三歳であり、今彼の前にい

る実際の彼女の姿は設備の中で三年を経たのちの十六歳である。

この年代の三歳の姿の違いは、もともと別人であると考えている春

雄にとってそ

れでもなお同一人物であると決めつけることに大きな邪魔となった。結局、三九歳の一馬と十六歳のハナはウメの甥子とその子供ということにして、

春雄の家族と一緒に暮らすこととなった。

しかし、言うに及ばず、ハナが『鐘鳴』と勝手に名付け連れてきた男の子、その

子はいったい誰だ、ということが問題になり、こちらはもともとどこの誰ともわ

からない子なので、そのまま『捨て子』として皆に理解された。

春雄の妻美津子は、きちんと警察なりに届けて彼を手放すことを主張した。

彼女の言うことは至極当然のことであり、そうすべきであることは誰も否定でき

なかったが、どうしたことが、一馬がしまいには『実は。。。』と、自分の子供で

あると言い出し、そこへハナの彼を手放したくない感情やら、美津子のヒステリ

ーやらがぶつかり合って、話し合いはいよいよ收拾がつかなくなっ

た。

そうこうしているうちに、たちまち一ヶ月という時が経過した。

<十一>

鐘鳴は、相変わらず言葉をしゃべることができず、春雄の家族から見てもかなり

『変』な子だった。

初めのうち、春雄の子供で七歳になる薫は、彼にかまって色々と話しかけ、とき

どきは弟を加え三人で遊ぶこともあった。

しかし彼の場合、大抵は下を向いていて、ときどき上目遣いに人を見る時、黒目がひっくりかえってしまって、ほとんど目が白目だけになることがたびたびあった。

薫も幼い直樹も、彼の目が段々と怖くなってきて、そのうちほとんど話しかけることもなくなった。

彼が庭の離れにあるトイレに行くときは、いつもハナがついていく。食事も皆と一緒に食べることを嫌がり、いつも皆が食べ終わったあと犬猫のように台所でハナが食べ物を与える。

そのうち、美津子は、彼のことをこう言って子供たちに伝えた。

「鐘鳴はね。うんと知恵が遅れてるの。かわいそうだけど、あなたたちは、あまりあの子にかかわらないようにしなさい。」

ハナはこのところ美津子に声を掛けても無視されることが続いており、じつと我慢をしていたが、このときばかりは耐え難い思いを味わい、鐘鳴を抱きしめて一人泣いた。

いつしか鐘鳴は、ハナを離れて一人で家のどこか暗いところで隠れるようにして、いることが多くなった。

ハナは、ほとんど毎日、ウメの作っている野菜畑で野良仕事を手伝っていた。

夕方畑から帰ると、まず、「鐘鳴。カナル。」と彼を探すことから始まって、彼

を見つけると、納戸や押入れから引きずり出して、ただただ頭を生懸命撫でて

やった。

話をしない、話のできない 鐘鳴に対して、そのときのハナにできることはそれ
くらいのことだった。

その後、状況がほとんど変わらないまま、六年半の歳月が流れていった。

春雄と美津子の子供たちは、薫が今年中学三年生へ、弟の直樹は小学校を卒業し、
中学に進学する時期であった。

ハナがもともと一番気になっていて、どうにもできなかったことは、鐘鳴を学校
に行かせることができなかったことである。

彼がかつて他の子供と同じように小学校に入っていれば、もう今年
は五年生にな
る年齢だ。

もちろん、小学校入学の時期に、彼が他の普通の子たちと一緒に勉強
をすること

など到底無理だということくらい百も承知していたが、彼女の悩み
不安の根本は
そういうことではなく、そもそも自分も含めて彼は戸籍も何も持た
ない人間だ、
ということである。

「あの子は普通じゃないのよ。放っておきなさい。」
美津子が頻繁に使うその言葉は、もはや鐘鳴だけに向けられたもの
ではなく、ハ

ナ自身にもはっきりと向けられていた。

悩み不安を誰にも相談できず、ただ時ばかり費やすことになってしまったハナは、もう生きてはいけけないのではないかと考えるようになった。

ハナは完全に生気を失っていた。

首をうなだれるようにして、ふと庭の端の方にいる鐘鳴の方を見てみた。

彼は庭にいる野良猫の手（前足）を両側に強く引つ張っていた。その猫は昔、家の庭にいたミーの子孫かもしれない。

いえ、そんなことはどうでもいい。今まさに猫は断末魔だ。

「フルルルルルー！！」「フルルルルルルー！！」と猫の鼻息。

彼も負けじと「フー！！」「フー！！」と気味の悪い声を喉の奥から絞らせている。

それでもなお、彼は猫の手を放さない。

ハナは、彼の行動にびっくりして、思わず大きな声を出していた。

「鐘鳴！何してるの。猫を放しなさい！！」

彼は、ハナの方に振り返ると、猫を放し例によって白目を剥いて立ち上がった。

今度は何か異様な雰囲気だ。

幾分下を向いているので、長く伸びた横髪が下がって白い目だけがハナの方を向いていた。

ハナは彼のその姿を見て、一気に顔が崩れ、大粒の涙が頬を伝うのを感じた。

そしてそのあと天を仰ぎ、今までにない大声で人をはばかりることなく絶叫した。

その声の先には、薄ぼやけた昼間の月が見え、その手前を薄い雲が静かに流れていた。

その数日後、家には大きな事件が起きた。
ハナの父一馬が、老いた母ウメを伴い家を出て行ったのだ。
残された封書の中には、今生の別れの言葉が綴られていた。

『我はウメに出会えたことだけで充分幸せであった。ウメも同様だ。
よって、我

はウメと共に旅立つことにした。

人生の終わりの場所は我等で探す。我等は共にその人生に悔いも未
練もない。

春雄。もう我等にかまう必要はない。安心し、従前の生活を取り戻
すべし。子供

は大切な宝物。世に人に恥じぬ立派な人間に育て上げよ。

ウサギ。我は将来あるお前の人生を狂わすことになった。本当に済
まぬ。羽柴は

今も沼木に一人住んでいるので、彼を頼り今後も生き続けよ。己の
生きることの

み考えよ。羽柴も強く生きている。人生捨てたる者は我等だけで充
分。これ以上、

死に行く不幸は出すまじ。』

封書の脇には、一馬がいつもポケットに携帯していて、山の設備を
開くときに使

っていた例の石の板が置いてあり、その下には『ウサギに預ける。

巷の者に渡ら

ぬよう、良きに判断せよ。』と書いた紙が敷いてあった。

さらに続いていること。

一馬とウメがいなくなった翌日、これに続くように、家のまわりか

ら鐘鳴の姿が
忽然と消えた。
八ナは気が狂ったように家の中やまわりを捜しまわったが、彼を見
つけることは
できなかった。
このことは、今の八ナにとって両親の失踪以上にショッキングな出
来事であるよ
うにも見えた。

<十二>

私には、鐘鳴がどこへ行くところとしていたのか、一つの心当たりがあ
りました。
そう言いますより、鐘鳴の行く場所は他にはあり得ません。
彼の記憶の中の故郷の生家。
四ツヶ岳の頂上付近から見下ろす、山にカモフラージュされた巨大
な設備。
そこが唯一、彼の心の故郷です。
人のぬくもりは微塵もありませんが、そこは疑いもなく彼の故郷で
す。

ただ、彼をこの家に連れてくる時は、まだわずか三歳でしたし、
ほとんど私の
背中で寝ていたことを考えると、到底一人で四キロ程度離れたあの
地へたどりつ
けるとは思えません。
僅かな望みとして、考えられることは、この家から四ツヶ岳の頂上
付近までは、
向こうからの三叉路は何箇所かありますが、こちらから登ると川沿

いの一本道で、
彼がそこを上つていればつかまえられる可能性がある、ということ
です。

私は、何故自分が鐘鳴にそこまでして気を入れてしまっているのか、
よくわかり
ません。

でも、そうせずにはいられない何かがあるに確かにはありません。
あわれみの気持ち？それは確かにあります。でもそれだけではない
と思います。

私自身の孤独感から？それもああるけど、何となく気持ちの全部を説
明することが
できません。

それとも、私が彼の中に自分を見ていたから？
考えれば考えるほど私は自分の気持ちがわからなくなっていきまし
た。

もう、この家にいる理由は私にはありませんでした。

私の中に小さな目標が生まれました。取り急ぎ鐘鳴を捜すこと。
何の目的かはよくわかりません。
でもそうしなければならぬのです。

今の私は、どんなに些細なことにして、目標がなくなることイコ
ール『死の選
択』になるような気がしていました。

私は、父の言う通り、とりあえず羽柴さんの所へ行き、鐘鳴を一緒
に捜してもら
おうと思いました。

私は、春雄くん、いえ、春雄さんにも何も告げず少しばかり増えた
自分の持ち物
をまとめ、家をあとにしました。

手掛かりが通称の『沼木』地域というだけで、捜すのに手間取りながらも、私は

ほどなく羽柴さんの居所を発見しました。

羽柴さんは川の堤下のところにある、もう誰も使わなくなった納屋に一人で住んでいました。

ほとんど乞食のような格好です。

いえ、そう言うと『乞食の方』たちが、侮辱するな、と怒りそうな格好です。

彼は、約六年半ぶりに逢う私の姿に、目を輝かせ、小躍りして喜びました。

私は確かもう二三歳。

彼の年は、はなから不明でした。

最初に会ったときは、『やたらに軽いおとな』だったのですが、今は大体『あぶ

らぎったおじさん』くらいの年齢になっています。

よくわからないかな。

私は、「別れ際、お兄さんに会いに行くつて。」と口を開きました。

「とつくに亡くなった。研究所から失踪してどこかで交通事故で亡くなったし

まったらしい。でも本当のことはよくわからない。他の所員もいないから、捜す

のもやめた。」

(まずいことを聞いちゃった。)

彼は私に近寄り、その手が私の肩に触れるか触れないかのタイミングで、私は思

わず手が出てしまいました。

ビシッ！！

「あっ！」

彼の頬に久しぶりのビンタです。しかも思いっきり。

「痛ってえ。ウサギ。ひどいよ。ひどいよ。何するんだよ。俺、何かした？」

「ごめんなさい。つい反射的に手が動いちゃったの。」と私。

「何だよ。何の反射だよ。訳がわからない。」

彼の衣服は服とは言えないほどぼろぼろの『すだれ』状態で、隠さなければいけ

ないところも、前から見ると全然隠れていません。

野に棲む獣けものとほとんど同じ状態です。

何の反射、かと問われれば、そんなことになりましたが、私はとても恥ずかしくて

言葉をきりだせませんでした。

（本当にごめんなさい。私、決してあなたのこと嫌っている訳ではないの。むしろ頼りにしてる。）

ただ、今のあなたの姿がすごく気持ち悪いだけなの。）

羽柴さんのところには、腐った魚や昆虫、その幼虫など、ほとんど人の食べるよ

うなものはありませんでした。

羽柴さんと私は、設備のある山へ行き、私が父から預かった石の板を使って山を

開き、中の設備から当初出発時に運び込んでいた食糧の残りの一部を運び出し、

当面の食料を確保しました。

まだ、設備の中には相当の食糧があります。

出発したときから節約していたこともあって、おおむね半分強、つまり三人で一

年半分くらいのお食糧は残されていきました。

私たちは、四ツヶ岳の峠近くまでの道や、周辺の緑地、河原、そして家のある里

とは反対側の麓まで、鐘鳴を捜し回りました。

体を動かすことの嫌いな羽柴さんでしたが、このときばかりは一生懸命、獣のよ

うに捜してくれました。

捜し始めて一週間、私は鐘鳴を捜す、という当面の生きる目標を失いました。

根拠も何もありませんが、私は、それでも待つていればいつかは鐘鳴が設備のと

ころへ来るのではないかと考え、設備の入り口外の辺りの草むらで寝泊りするよ

うになりました。

失礼な言い方かもしれませんが、半分獣化してしまった、もと物理学研究者の羽

柴さんを見るに忍びなかったこともあります。

しかし、日にちはただただ無駄に過ぎていくだけでした。

ある日の朝、息苦しくて眠りから覚め、ふと気が付くと、隣に羽柴さんが丸くな

って寝ていました。

腕はしっかりと私の首を抱えこんでいました。

その姿は、昔、教科書で見た原始人とほとんど同じ風体でした。

（私も寂しいけれど、彼も寂しいのね。）

私は、彼の腕をふりほだき、揺り起こし、次に自分でも訳のわからないことを口

走っていました。

「ねえ。私、もう神様のところに行くから。」

彼は、眠い目をこすりながら、「よし、わかった。俺も行く。」

「ううん。私一人でいいの。向こうへ行けば両親もいるし。寂しくないわ。」

彼は何を思ったか、すつくと立ち上がり、

「山を開ける。出発だ。」

「?????」

「早く。これから神のいるところへ行く。そうだね。」

<十三>

そのとき、ハナ、二三歳。羽柴、年齢不詳。ただし、『獣化したあぶらぎったお

じさん』?くらいの歳。

設備がその推進力を取りこめる限り亜光速で飛び続け、最後は宇宙の『塵^{ちり}』

』となつて神のもとへ行く。

羽柴はそんなことを考えていた。

ハナも無気力に頷いて同意した。

設備の規程ともいうべき十三日後に出発すべく、羽柴は原始人からもとの科学者

に突然変化して、設備に指示を与えた。

ところが、設備の『光』はこれ、つまり『死』を許さなかった。

懸命に翻訳パネルを用いて、信号を使い説得する羽柴。

設備が、光の波長で伝えてくる。

《《《周回軌道で出発地へ帰還すること以外の選択はできない。》》》

(羽柴) 『光速に最も近い速度まで加速しろ。』

《《《意味不明。最も近い、の意味。》》》

(羽柴) 『この設備の最高速度を示せといってるんだ。馬鹿か。』

《《意味不明。最高、の意味。馬鹿、の意味》》

(羽柴) 『最高とは、現在の設備の能力の最大値だよ。馬鹿は無視していい。』

《《計算。・・・光速の約九九・八八五%。》》

(羽柴) 『前は、光速の九九・九二五%だった。能力が落ちていく。その理由は、その理由は何だ。』

《《現在の条件の1。誘発干渉光子量、十進換算にて概算保有量三三六二五

八九二と十の四九五二三七乗の単純積。条件の2・周回軌道で出発地へ帰還する

こと。理由は条件の1の相違によるもの。》》

(羽柴) 『数字の根拠がさっぱりわからん。単位すらわからない。すぐに教える。』

《《光速は光波の伝播定速度。誘発干渉光子量は単電子量単位。》》

(羽柴) 『単電子量単位だと？・・・もういい。お願いだ。どこでもいいから

着陸か衝突かしてくれ。』

《《意味不明。どこでもいいから、の意味。》》

(羽柴) 『私は神のもとへ行くのだ。そうさせてくれ。』

《《意味不明。のもと、の意味。させてくれ、の意味。》》

(羽柴) 『ん？神は理解するのか。武嶋さんはどう定義した？』

《《神は理解。入力定義は、宇宙の真理の擬人化。》》

(羽柴) 『真理はどう定義した？』

《《真理の入力定義はなし。確率分布信頼区間内の推定定義。》》

(羽柴) 『だからおまえ自身は真理をどう定義したんだと聞いてい

るんだ。』

《《意味不明。おまえ自身、の意味。》》

(羽柴) 『そつちの意味じゃない!!この屁たれが!!』

《《意味不明。この屁たれが、の意味。》》

羽柴は、やり取りがまどろっこしくなり、設備のパネルの脇を蹴とばした。

そして、最終的に『光』に許容された内容をハナに伝えた。

「ウサギ。宇宙の塵になるのは駄目だってさ。」

「どうしろって言うの?」

「地球に戻ってくるのさ。やっぱり前とほとんど同じ三年間の航程だ。加速と減

速は前回と同じだから亜高速期間の一年と合わせて約三年間だ。燃料のせいか何

かわからんが、前より亜光速の速度が少し遅いらしい。単純に計算してみると、

亜光速時の一年で地上では約二一年経過する。どうする?言うとおりにやってみるか?」

「よくわからないよ。私に聞かれても。」

「俺たち、今のこの世に未練はないし。また、未来に旅するのも手だ。それもい

いだろう?ははは。」

羽柴はやけに明るい。

彼は、ハナが鐘鳴を捜していたときのよう、ある意味、目的のわからない目標

を一時的ながらも得たのだ。

ハナからみても羽柴はつきり生き返っていた。

ハナにとっては、思いもかけない方向へ転回することになってきたが、これも誰

かか意思であるならそれに従おう、と彼女は考えた。

まだ少しは、彼女の中に、生き続けることへの想いが残されていたのかもしれない。

ハナは三年間、『獣化したあぶらぎったおじさん』と二人で宇宙空間を旅することになり、ためらとにやや躊躇いがあったが、それよりも現実の世界から早く抜け出したい気持ちの方が焦りとなって彼女の意思を早く固めることになった。

『光』は、最終的な出航の確認を求めてきた。

《《あなたの指示に従い、地球時間の八六四〇〇秒（一日）後に出航します。》》

本当によろしいですか？》》
羽柴は神妙に『はい。』を返す。

食糧の確認。

食糧の残量は、二人で二年分くらいだったが、前回もかなり予定より余らせており、問題ないと考えられた。

三階、生活空間の機能は全て正常に保たれていた。

出航の一時間前まで、羽柴は最上階の部屋で『光』と会話をしていた。

ハナはその脇で、部屋の天井近くにある四つの丸い窓を見ていた。設備の外の様子が良く見える。

窓の外、というより、それは設備の入り口辺りの一階の風景を映し出したものである。

当時、ハナがこれを見たときには、不思議な窓として理解に苦しむものであった

が、彼女にとつての未来の家では『テレビ』として普通に存在していたので、今となつては不思議なものではなかった。そこには、以前見たときのように、木々や草花が風に揺れている姿が映っていた。

羽柴がハナに伝えてきた。

「『光』が、設備のすぐ周りにヒトの赤外線を感知したと伝えてきた。山を開く

のは普通は出航の千八百秒前、つまり三〇分前のようだが、念のため、ぎりぎり

の三百秒前にする、とのことだ。」

「ちよつとモニターで外の様子を確認してみてください。」

「はい。」と私。

ハナは、モニターテレビを見上げて目を凝らし、仰天した。

「か、鐘鳴よ！カナル！！生きていたんだわ！！」

「何い？本当か！」

羽柴は、ハナのところへ一目散にとんできた。

「ほら、見て。間違いない。ほらよく見て。入り口の左側。あの顔。間違いない！」

「！」

「近すぎる。山が開くとやばい。つぶされるぞ。」

「ちよつ、ちよつと何言ってるの。そんなことより、秒読みをすぐ止めさせるの

よ！！！」

「よし、わかった。」

(羽柴) 『出航は一時停止、延期だ。秒読みを停止しろ。』

《《不可能》》

(羽柴) 『可能かどうかを質問しているんじゃない。直ちに停止しろ!』

《《出航を停止しない。》》

(羽柴) 『緊急事態だ。通常じゃない。命令だ。』

《《二四〇〇秒後に出航する。》》

(羽柴) 『よーしわかった。それでは、停止できない理由を示せ!』

《《理由の1。今、設備内誘発干渉光子の活動を停止しても、設備外の放射線

帯の活動は有効につき規定時間に必然に推進を開始する。理由の2。誘発干渉光

子の活動を停止したままで地球の重力加速度の束縛を脱する確率は〇・八%未満

で九九・二%以上の確率で大気圏内で失速する。理由の3。》》

(羽柴) 『わ、わかった。定時の出航は認めよう。では、すぐに山を開き設備の

扉を一時開けるから、ロックをはずせ。外にいるヒトを中に入れ、再び閉じてか

ら出航する。』

《《ヒトは設備に入ることはできない。決められている。》》

(羽柴) 『俺に命令するな!ロックをはずせ!』

《《意味不明。命令するな、の意味。》》

(羽柴) 『今すぐロックをはずせ!!命令だ!!』

《《ヒトは入れてはいけない。》》

(羽柴) 『理由を示せ。ヒトを入れてはいけない理由だ。俺たちもヒトだぞ!』

《《理由の1。宇宙の真理の擬人化の命令を優先。》》

(羽柴) 『何い? いったい何のことだ! 何を訳のわからないことを! わからんぞ

!』

まったくやりとりにならない。

「ウサギ。だめだ。もう間に合わない。出航は避けられない。」
ハナは叫んだ。

「早く。ともかく、話をさせて、あのしゃべらない鐘鳴が何か叫んでる。スピーー

カーとかマイクみたいなものはないの？」

「ある、ある。オーライ。ポリユウムを上げるからちよっと待て。」
「早くして!!」

突然、耳をつんざくような声が壁の方からあがりました。

「ウ。ウサギ。ぐうう。ウサギイ。ぐうう。」

(鐘鳴。あなたの言葉ね。私がウサギって呼ばれてるの知ってるのね?)

この世に生まれて十一年。初めて聞く彼の言語。

「鐘鳴!!カナル!!あなたのウサギよ。ウサギ!わかる?」

なんと鐘鳴は、「ウサギイ。わー!ウサギイ。ボク、カナルだ。ウサギ。」

どこいく?!」

沢山、沢山、喋っています。

私は目が涙ぐるしくして真っ赤になりました。

「ああ……私のカナル!!」

「ウサギ!ウサギイ!!ボクをおいていかないで!おねがい!おねがい。ボクが

なしいよ。」

私は、羽柴さんの方へ向き直って、信じられないような怒声をあげました。

「何ぐずぐずしてるのよ!!今すぐ扉を開けさせなさい!早く!私、

すぐに下に

迎えに行くから。今すぐよ!!」

「ウサギ。ちょっと待て。だめだ。扉は拒否されてる。それより、危険だ。鐘鳴

を山肌から遠ざける! 離れるように言うんだ。周りはバンアレン帯並みの電磁帯

が渦巻いてる。宇宙服もない体がもつ筈がない。」

私は、「そんなことどうでもいいから、早く開けさせて!!」と言つてエレベー

タで一階へ向かおうとしました。

エレベータが電源を停止しています。全然動きません。

私は大きな声で天井に向かって、「一階に行くのよ。出航の準備よ。さあ早くこ

れを動かさない!」

光信号と翻訳機を通じずに、『光』に日本語が理解できる筈など有り得ません。

それでも私は天井に向かって叫び続けました。

「早く動かさない!! 今すぐによ!!」

「あなた、私たちを死なせる気? 体をくりつけないと、私たちは加速度とやら

で死んでしまうのよ!!」

何と信じられないことに、壁のスピーカから、『光の声』がたどたどしい日本語

で流れてきました。

《《カナルは入れてはならない。》》

私は、頭が真っ白になりました。

(カナルは入れてはならない、って言った? 誰?)

(何で、何で？彼に私の付けた名前、『鐘鳴』の発音を何故あなたは知っているの？あなたはいったい誰？何者？)

光の波長を介しての会話は、当然言葉の意味のやりとりであって、音声はまった

く会話に関係がありません。

『光』に音を聞き分ける耳でもない限り、それを知る筈もありません。

何か、返答に困って、ついに正体を現したような人間的な感覚。

(あなた、単にプログラミングされた機械じゃなかった？あなたに感情のようなものが有るの？)

私は言いようのない恐怖を感じぞっとしました。

羽柴さんの声がしました。

「ウサギ。出航まで三百秒だ。ここにいると危険だ。脇の階段で四階の観覧室ま

で降りよう。」

羽柴さんは、荒縄を手に持っています。それは言うまでもなく出航の準備です。

私は抗議しました。

「鐘鳴は？鐘鳴はどうするのよ！」

「もう駄目だ。間に合わない。」

「いやよ！乗せるのよ。絶対。」

私はもう一度天井に向かって、

「許さないわよ、あなた！絶対！扉を開けなさい！ぶっ壊すわよ！私は本気よ！」

「おい。ウサギ。誰に言ってるんだ。気でも狂ったか？！」

出航まで三百秒をきっています。もう既に山が開いている筈。

一階の扉さえ開けば、鐘鳴はそこにいます。彼はきつと中に入ると

思います。

「聞こえないの？あなた！扉を、あ・け・な・さ・い！！今すぐ！！」

「ウサギ。やめろ。早く降りろ。早く！」

「そう。よし。見てなさい。」

私とその部屋に沢山あるパイプを壊しにいく、ととつさに予感した羽柴さんは、

私の胴体に両腕をまわして制止し、そのまま私を抱えるようにして階段を駆け下

りました。

私はただただ狂ったように彼の腕の中で暴れていました。

羽柴さんは、暴れる私を四階の観覧室の端にある柱にくくりつけ、自分も反対側の柱にくくりつけました。

「鐘鳴。カナル！」

「もうだめだ。彼が設備から離れていることを祈るだけだ。そこらにいたら命はない。」

私は絶叫していました。

「きゃーーーーー！！いやーーーーー！！」

やがて『ブン』、と大きな音が一回鳴りました。

私の体は縄で柱にくくりつけられていても、強烈な勢いで床にお尻から叩きつけられました。

痛みで声も出ません。

もうちよつと体が硬かったら足の骨が折れていたかもしれません。

前のときと同じようにお腹と首が圧迫されてどんどん痛みがひどくなります。

「カナルー！」
振動や音が全くしない中で、一人私は叫び狂っていました。
真ん中の黒い柱が、あのとときと同じように鮮やかな青紫色になっています。

しばらくして、やっと体が軽くなって、出発する前と同じ状態になりました。

私は柱と一緒にそのまま眠りにつき、何度も鐘鳴の夢を見ては起き、寝ては起き、

気がつくと三階の四一番、居間の長椅子に横になっていました。
テーブルにメモが置いてありました。

『風呂に入ってくる。目が覚めたらまず飯にしろ。四〇番の食堂に用意してある。』

食べたら八番の俺の部屋で仲良くしよう。』

(本当に優しい。羽柴さん。ありがとう。)
こうして、私もやっと少し落ち着いてきました。

<十四>

出航して一週間が経ちました。

私は、夕べ、とうとう羽柴さんとずいぶん仲良くなってしまいました。

羽柴さんはこの世で唯一の同じ時代に住む人間、これが私の気持ちの拠りどころ
になっていたのは確かです。

羽柴さんはユーモアがあって、一人で考え込む私を時折『人間』に戻してくれま

した。

服装の趣味は悪いし、話題にもいわゆる下ネタが多く、会話が続かないのが難点

ですが、そういう話も楽しく感じることはありません。

おかしくしてお腹をかかえて私が笑うと、彼は勝ち誇ったような顔をします。

それは、彼も満足するし、私も楽しいのですから、誰かが楽しくなつてそのかわ

りに誰かが悲しくなるといふ、世の中によくありがちなゆがんだ幸せ感とはあき

らかに異質なものです。

私は、当面、何か具体的な目標がなくても、生きていけそうな気になつていました。

そんな私を許さない、と言いたげに、突然の恐怖と不幸が訪れてきました。

ガチャン。ゴトン。ガチャン。ゴトン。

三か月ほど経過しました。

夜、私が寝ているときに、同じ三階の部屋の外の回廊で、每晚何かの音がするようになりまし

た。その音は、夜中二時ちょうどに、三階の入り口の方、私の部屋の反対側辺りから

始まって、約二〇分くらいかけてゆっくりと回廊を時計回りに一周するよう

いていきます。

私の部屋『三二番』の前は二時十三分頃に通過し、その音が最も大きくなります。

各部屋は目の玉の認証で施錠されますので、何かが勝手に開けて入ってくることは

はないと思いますが、二時十三分頃は緊張して、毎夜、自分自身の心臓の鼓動の

高鳴りを覚えます。

私は、段々寝不足になっていきました。

二時二十分を過ぎる頃に音がやみます。

私は、最初羽柴さんが何かよからぬことを考えていたずらをしているのか、と思

いました。

でもちよつといたずらにしては手がこみすぎています。

羽柴さんが日中このことを何も言わないことが彼を疑う唯一の理由でした。

絶対に聞こえている筈ですから、話題にしない訳がないと。

しかし、ある朝、彼は、『いたずら』という期待を裏切る発言をしました。

「ウサギ。俺怖い。ああゆうのは苦手なんだ。今日から一緒に寝よう。」

私は、「ははあ。またまた変なこと考えてるな。君は。だめだよ、娯楽がないと

いって、いたずらが過ぎるよーだ。」

「違う。ウサギ。あの音が自分の部屋の前を通過するとき、横の壁の方を見てみ

る。白い壁がガラスのように透明に感じて、壁の向こう側に人の姿が見えるから。」

「やめてよ。ここは二人だけよ。怖がらせるのは、なしよ。」

「嘘じゃない！冗談でこんなことは言えない。おまえの言うようにここは二人だけだから。」

「なあ。ウサギ。この設備は、今回、俺たちに何かをしようとしている。」

「何かって、何？」

「わからない。でも、これは前回の三年間ではなかったことだ。前回はずべて俺

たちの予想通りにことが運んだ。今回は最初から異常だ。今回の出航はまるで運

命で決められていたかのようだ。」

私は彼の言っていることがよくわかりませんでした。

ところが、私は彼の言葉に、はっと気付かされたことがありました。

「前回は、すべて私たちの予想通りにことが運んだ、と言った？」

「そうだ。」

「違うわ。」

「最初に鐘鳴がいたのよ。これは予定外だわ。」

彼は、何か青ざめたように見えました。

私は、この設備が出航するとき、『光』が意志を示したような体験を彼に話しました。

「

日本語が聞こえたって？『光』の奴が？嘘だろう。」

「嘘じゃないわ。『鐘鳴を入れてはならない』って。低い声ではつきり聞こえた

のよ。」

彼は頭を抱えて首を横に激しく振りました。

「きつとどつちかが殺されるんだ。彼らに必要なのない方が。そうに違いない。だ

から食糧も二人で三年分ないんだ。」

「それは考えすぎよ。食糧は間に合う筈よ。」

私は、その日から特に食糧の減り具合を気にするようになりました。予定通りで行けば二年と少しで底を尽きます。

前は予定より消費量が少なかったので充分と判断しましたが、今回は逆の事態が発生しました。

頼みの缶詰の腐食が進んでいて、食べられないものが次々と出てきたのです。

彼は、これを見て、しばらくじっと考えてから、「まるで何十年も保存していた

ような状態になっている。強電磁波の影響があるのかもしれない。

場所を移動し

よう。」と言いました。

毎夜、私と羽柴さんに、ある種の恐怖感を与え寝不足にする『音』の存在。

もう耐え続けることはできません。

羽柴さんは、食事のとき以外は、昼間も『八番』の自分の部屋へ閉じこもり顔を

あわせることが少なくなりました。

もう、誰にも頼ることはできない、私はそう感じました。

私と羽柴さんは、ひょっとして何かに支配されているのかもしれない。

そして、私たちにできることには限界があるのかもしれない。

でも、何をどう支配するものであっても、そこには何らかのルールがあって、何

でもできる、何をしてもいいという訳ではないような気がします。昼間決して姿を見せることのないそれは、何か目的はあったとしても、『ゲーム』のようにやっぱり何らかのルールに縛られていると思うのです。ですから私たちも、できることをルールに基づいて行動すればいい、必要以上に恐怖感を持つたり、卑屈になったりすることはない、そう開き直ったように思いました。

私は、昼間、羽柴さんには内緒で、かつて父の字で『船内基本設定区域』と書かれた一階の場所に忍び入りました。

私の目的は、ただ一つでした。私は大胆にも、動きながらその音を発生させる『何か』をどこかの部屋に閉じ込めてしまおう、と思ったのです。

それには、三階の回廊の内側に四九ある扉によって区分された各部屋の間を仕切る壁を、常に私の手で自由にできなくてはこころもとありません。各部屋の間を仕切る壁は、一階の『船内基本設定区域』でしか操作できないこと

をかつて父に聞かされていましたが、その父が自分のいた三階の『一番』の部屋で、この操作していたことを見ることがありました。

私は、それを見て、何とか三階の自分の部屋でも各部屋を仕切る壁を操作できないか調べましたが、どうしてもできません。それは当然のことです。

各人は、自分の部屋の床などを操作して、自由にレイアウトを変え

することはできませんが、部屋を仕切る壁まで自由にできるとなると、セキュリティや個人のプライバシーも何もあつたものではありませんし、第一、扉の施錠の意味がありません。

これは、おそらく『船長』にのみ与えられた特別の権限であると思います。

そこで私は、『船内基本設定区域』に解決の答えがあるかもしれないと思い、忍び込んだのです。

『一番の部屋で認証の搭乗者なきとき、死亡したとき、消滅したとき、いずれかの場合、三三番に搭乗の者をエニー権限者とする。』

父の字で計器の下にそう書かれた紙が貼られていました。

それは、おそらく父が以前に設定した、父がいないときは、私を『船長』にする、

という意味だとすぐに理解しました。

私は、自分の部屋と同様に、脇にあるガラス窓に目の玉を向けて、日本語で記されたパネルの『施錠の解除権限』と『仕切り壁の現場操作権限』を選択して、これを自分のものにしてました。

他にも十数項目選べる内容がありましたが、まったく意味を理解することができず、何だか怖いのでそのままにしておきました。

最後に、『自身が搭乗なきとき、死亡したとき、消滅したとき。』の選択肢として、次のエニー権限者を選ぶような画面になりましたので、羽柴さ

んのいる『八

番』のパネルを押ししました。

その後、私は現地で何度も壁の設定をしてみて、練習を繰り返しました。

こうして、私の意を決した試みの準備が整いました。

ガチャン。ゴトン。ガチャン。ゴトン。

夜中の二時九分です。

私はあらかじめ自分の部屋である『三二番』の隣、『三一番』に待機しています。

さらに隣の『三〇番』は開放してあります。

『何か』が首尾よくそこに入ったならば、私は部屋を出て外から施錠します。

いたって簡単な内容です。何かネズミ捕りみたいな感じですよ。

『何か』を閉じ込め、身の安全を確保してから、私は隣の『三一番』に戻り、その間の壁をほんの僅か下げて、それと何らかコンタクトの取るので

決して閉じ込めることが目的ではなく、コンタクトを取ることが大事な目的です。

心臓の鼓動が高鳴る中、『何か』は隣の『三十番』の前で音を停めました。

数十秒間、何も音がしません。

（早く入れ。早く入れ。）と念じ続けました。

再び、ガチャン。ゴトン。ガチャン。ゴトン。

何となくですが、部屋の壁の方から音がします。

（部屋に入った！間違いない！）

私は待機していた『三一番』の扉を開け回廊に飛び出し、『三〇番』の扉を外から閉めて施錠しました。

何回も練習していましたが、頭が空っぽでも簡単に体が動きませんでした。

（やったー！閉じ込めた。）

私は喜び勇んで『三一番』の部屋へ戻りました。

そこで、私は全身が凍りつきました。

私のいる『三一番』と『三〇番』の部屋の間壁はなくなっているように見えませんでした。

いえ、良く見ると、それはガラスのように透明になっていたのです。透明の壁の向こうで、それは二本足で立っていました。

その丈、三メートルくらい。二本の足と指のある二本の手のようなもの。

頭はどこかというと、……、ありません。

しかし明らかに正面と思われる側がこちらに向かっていますので、こちらをうかがっている、と思いました。

それは、透明の壁に向かって進んできて、手をぶつけてきました。ガキーン。

硬いもの同士がぶつかったような音がしました。

「キヤーーーーー！！」

私は思わず、後ずさりをしてそのまま仰向けに倒れました。何回もぶつかっては揺れて、倒れかけ、またぶつかって。

私は、ぶつかる音の大きさに鼓膜が破れそうでしたが、びくともしない壁と相手

のその姿を見て、次第に落ち着きを取り戻してきました。

ゆっくり起き上がってあらためて透明の壁の前に立ち、それと対峙すると、突然

それのお腹のあたりが横に割れて振動とともに凄いい音がしました。

「ゴローウー!!」

「ぎゃー……!!」

私はまたも、後へ跳ぶようにのけぞって仰向けに倒れ、今度は完璧に頭を床に打ちました。

(痛っ!!。) 私は打った頭をこすりながら、

(こいつ。相当頭が弱い。私でも勝てそうだ。) さらに思いました。

(このお馬鹿さんとはコンタクトを取ってもあまり意味がなさそうね。)と。

その後私は、その『怪物』をどうしていいかわからず、かといってそこから出すこともできず、ひとまず自分の部屋へ戻りました。

朝起きて、隣の部屋に見に行くと、その怪物はすっかり観念したようにおとなしくなつて床にべたつと貼り付いていました。

私は、朝食に來ない羽柴さんが心配になり、また、怪物を捕らえたことを教えて

あげようと『八番』の羽柴さんの部屋を訪れました。

何度呼んでも返答がないので、父の権限で扉を開けて入るとそこには誰もいませんでした。

それから私は、何日も何日も彼の事を捜し回りましたが、ついに見つけ出すことはできませんでした。

缶詰は反対側の『十二番』に移してみました。さらに腐食が進み、このまま腐

食が進むと私一人でもぎりぎり食糧がもつかどうか、微妙な具合になつてきまし

た。

ある日、羽柴さんの部屋へ行って彼のことを回顧しているとき、私は偶然に、彼
がいなくなってしまった原因を知ることになりました。

中心の柱近くにある、物質の消却装置の安全レバーが外されていたのです。

これは、その部屋にいる者にしか外することができません。

私は、言いようのない悲しさ、虚しさを胸に留めておくことができず、大きな声
を出して、

「ああ。羽柴さん。あなた、元はと言えば、二人で宇宙の塵になる
うっていの

が最初の出航の目的じゃあなかったの？

なんであなただけが先に逝ってしまうの？私に何も言わずに・・・。

「

（ねえ。私どうしたらいいの？もう死んでしまった方がいいの？ねえ。お父さん。

お母さん。）

<十五>

ハナは、また目標を失い、その心は、宇宙に浮かぶ何も意思を持たない冷え切つ

た岩石のようであった。

自分で死に行くことさえも、無意味に感じてしまつようになり、何
に対しても喜

びも悲しみもなくなった。

生きている人間は、どんな些細なことでも、自分が未来に向かって『進歩』して

いることで喜びを感じ、後戻りしたときに悲しみや落胆を味わう。

しかし、生きる人間にとって、本当に耐え難いことは、『退歩』の悲しみではな

く、進歩も退歩もない、ただ停止しているだけの『空虚』の状態ではないだろうか。

ハナは、今や、その『空虚』すら、つらいと感じることができない。彼女は、人間でなくなってしまうのだろうか。

彼女は、『三〇番』の部屋で、エネルギーの供給源を失い、いずれかの日にはお

そらく死に行くであろう怪物の姿を前に、それを見下した自分を恥じた。

その怪物は、今もその手でときどき思い出したように、透明の壁を叩いている。

それは、絶命寸前までその『意志』を貫き通すのであろう。

自分の意志を忘れたハナは、こそくにもその運命を『天』に委ねることにした。

それは、しばしば都合よく人間の使う『手』でもあった。

彼女は、透明の壁を自らの意志で下ろし、両方の部屋をつなげ、怪物の思うがま

まにさせることにした。

何かに殺されること以外、死に行くことさえもできないハナに対し、『天』は、

これを許さなかったのか、

怪物は、彼女の見ている前で絶命した。

二度目に地球を離れて一千六〇日が経過した。

彼女が最上階にいて、『光』の放つ事務的な波長を翻訳機器が表示しているとき、

『太陽』の二文字が突然、彼女の目に飛び込んできた。

四階、観覧室のモニター画面に無数ある星の中で、最も近くに一つ、真つ白に輝

く星があり、それが太陽であることは疑いがなかった。

そういえば、観覧室から見る星は、ずいぶん前から『点』になっており、設備の

速度は相当に落ちていると感じられた。

ハナは、以前地球に帰還するときに、羽柴が教えてくれた言葉を思い出した。

『設備の速度は、今ではだいたい音速の二万八千倍を下まわった。一番早いとき

の三パーセント程度だ。』

ハナにとって、あのときは、言っていることとの感覚がまったくつかめるものでは

なかったが、二年以上図書館で仕方なく読んでいた書籍のおかげで、その意味が

大体理解できるようになっていた。

宇宙からあらためて見る太陽は、地球から見る少し黄味があった色とは違い、雪

のように白い星に見えた。

ほぼ真空に近い宇宙空間。

今のその光は素直に落ち着いて、何の反発も無く太陽の白い光を目に直接伝えてくれている。

ハナは、そのとき、誰に与えられたアイデアかどうかわからないが、ふと感じた。

（私は何気なく、光が『伝わってる』という感覚を持たされたけれど、伝えるっ

ていうのはどういふことを言うのだろう。）

（真空の中には原子核が存在していないことは事実。これは未来の誰も否定しな

いと思う。事実であり、第一、それそのものが真空の定義だから。

でも、光が伝わってる、という限りは、伝える何かがそこにはあるんじゃないの？

）

郵便のメッセージを伝えるにも郵便局員の人がいる。

何もなければ伝わらない。

重さのあるものを飛ばすしかない。

しかし、『伝わる』ということは根本的に違うのだ。

（本当に真空には何も無いの？何も無い、と思っただけではないの？）

『質量（重さ）』のあるものしか決してその存在を認めない、という極めて頑固

な考えが、ひよっとして地球の人類の歴史にはあったのかもしれないと私たちは考える。

彼らの『存在』という定義が、もしそうであれば、どんな人間もそれを否定する

ことは絶対にできない。

私たちも同じだ。

しかし、それは私にとって残念でならない。

このままでは進化を止めてしまつて、滅ぶしかない地球の人類は、それで仕方がないとは思えないほどの才覚の美しさを感じる。宇宙の中で、絶対に滅んではいけない稀有な存在だ。残念ながら、私の考え方に同意する生命体は少ない。

太陽は、数ある恒星の中では、お年寄りでも若者でもない、中年程度程度の星である。

また、そのエネルギー量も中くらいからやや少ない方で、それが寿命に達するときは、パワーのある大きな恒星のように大爆発はせず、今ある太陽系の範囲全域をほぼ飲み込むように膨張して、その後急激に収縮し、その命を絶やすらしい。そんな『ごく普通』の星、太陽でも、今は特別の輝きをもって帰還を待っていたようにハナには感じられた。

『お帰りなさい。』と。

帰還を前にしてのある日、ハナは不思議な遭遇を経験した。四階、観覧室にいて太陽を見ていたハナは、気がつくといつのまにか三方から『もの』に囲まれていた。

ハナは驚きもせず、ぼつと『彼ら』を見まわした。

「何？」

姿かたちの基本構成は、ほとんど地球の人間と同じだ。頭、胴体、そしてそれぞれ一対の手と足。

しかし違つところがある。頭に顔がないこと。そして全て薄緑色なこと。

衣服のようなものを着けているようには見えない。

身長は三、四メートルと大きい。あの怪物と同じくらいだ。

「あなたたち。誰？……」「ねえ。教えてよ。」

続けて彼女は、ポンと自分の手のひらを叩いて、こう言った。

「わかつた。お釈迦様でしょ。お釈迦様。ほーほほほほ。」

壁の中から、出航の時のあの『光』と同じ低い声がした。

《《”ニヨライ”、ではない。ニヨライの一部。》》》

八ナは声の主に対し、ウサギ顔のやや釣り目の目尻をさらに上げ、恨みを込めて

言った。

「あなたたち。一体何人の命を奪えば気が済む気？」

ああそうか。みーんな自殺だ。あなたたち殺してないもんね。そう殺してない。

ははは。

壁からは、同じ言葉が繰り返される。

《《”ニヨライ”、ではない。ニヨライの一部。》》》

八ナはすこぶる気味悪く感じたが、自分のペースで続けた。

「あのね。私はね。もう気持ちが悪くなるの。もう命とかどうでもいいの。わか

る？」

《《”シヤカニヨライ”ではない。ニヨライの一部。》》》

彼女はオウム返しのように同じことを繰り返す『光』の言葉に堪りかねて、

「おい！人の話聞けつての！おまえら私を馬鹿にしてるの！」

《《意味不明、聞けつての、の意味。馬鹿にしてるの、の意味。》》

いらつく心を、無理やり奥に引つ込めて、彼女は言った。

「そう。わかつたわ。質問を元に戻しましょ。あなたたちは誰でござんすか？」

《《光輝く、または、光を照らすの一部。》》

「光り輝くの一部、って言った？それこそ完璧『意味不明』だ！はは。」

何かにあわてたのか、『光』は立て続けにまくしたてた。

《《バイロチャナの一部。ビルシャナの一部。宇宙の真理の擬人化の一部》》

（よし。主導権を握った！）

「まずまず日本語じゃなくなったね。質問やーめた。何か言いたい事があれば言

いなさい。」

《《カナルはビルシャナの一部を持っている。これを尊重せよ。》》

「何のこと？鐘鳴は多分死んだわ。それはあなた達が一番知ってることよね。」

あなたたちが、出航のとき、彼をこの設備に入れさせてくれなかったからよ。」

《《真理の擬人化は、その一部でも滅することはない。》》

（うーむ。日本語になっていない。どうやら、こいつらとの日本語会話はこれ以

上無理だ。）

「会話中止！」

ハナはとりあえず、彼らを見殺し、思い切つて、彼らの間を通り抜け、扉の方へ

向かってみることにした。

そうしてみても、扉の前で、恐る恐る彼らの方に振り返った。予想した通り、彼らはマネキン人形のように動かない。

ハナには、彼らの姿の中に、意志が通っているようには感じられなかった。

それは、会話をスムーズにするための、人間向けの単なる一つのツールのような気がする。

そして、目の前の薄緑色の大きな姿は、おそらく彼ら自身の姿を形取ったものであるとも思った。

（断片的に会話をしていても始まらない。ともかく、会話は解読機を使ってきちんとして読ませよう。）

何らかの判断をするにしても、それからのことね。ハナは、かつてこの設備の搭乗者であった、ハナの父や羽柴が定義していない単語を彼らで使用したり、推理していることに気付いていた。

彼らの情報源や、情報の入手方法などは全く見当がつかなかったが、とり急ぎ、

ハナは、三階『四三番』の図書室へ行き、彼ら『光』が頻繁に用いる、意味のわからない単語、すなわち『宇宙の真理』について調べてみることにした。

仏教国のサンスクリット語で『真理の世界から来たもの』という意味を和訳し

たものが、いわゆる『如来』^{ニヨライ}であり、これは仏教で最高の境地に達した存在を意味する。

仏教の開祖が『釈迦如来』であるというのは、およそ宗教に興味のない人にもよく知られていることであるが、他に、報身仏という名でこの領域に達したのが、

『阿弥陀如来』と『薬師如来』である。

『釈迦如来』は真理を発見し、これを世に伝道することを今も実現していると言

われているが、そもそも、仏教で言うところの『宇と宙の真理』とは何かという

と、これを人間になぞらえ、つまり『擬人化』したものが、『毘盧舍那佛』（ビ

ルシヤナブツ）と呼ばれる存在である。サンスクリット語で『光り輝く』という

意味での『バイローチャナ』と呼ばれるこの存在は、『大日如来』と共に法身佛

と呼ばれていて、悠久の過去から永遠の未来までの『真理』そのものであるという。

ハナは、特段、特定の宗派に習う仏教徒であるわけでもないので、専門的な知識

は必要としないし、あまり興味がない。

しかし、『光』つまり、何らかの生命体が、宇宙の真理なるものを日本語にしようとしたとき、これを『毘盧舍那』（ビルシヤナ）と表現し、これ

の擬人化を

『毘盧舍那佛』（ビルシヤナブツ）としたことはどうやら、疑いなくいところのよ

うである。

ハナには、『光』の言う、『その一部』という表現がよくわからない

かったが、とても気にかかった。

何故かと言うと、鐘鳴がその一部を持っているといい、その一部は滅亡しないと

いう意味のことを確か『光』が言っていたような気がしたからだ。

全てを失って孤立してしまったと思っていたハナであったが、その心には、一つ

の、淡い期待がもたらされた。

それは、自分の前にひよつとしてもう一度、鐘鳴が現れてくれるのではないか、

という期待であった。

彼女は、またしても生きることの目標をそのとき得たのかもしれない。

<十六>

その設備がこの地に定刻に帰還したのか、そうでなかったのか、ハナには皆目わからない。

ただ、確かに言えることは、少なくともハナがお尻の青あざと額のタンコブ以外には何も問題なく、地球に帰還したことである。

あと一週間ほど帰還が後であったなら、食糧は尽き、彼女は餓死していたかもしれない。

偶然か、必然かわからないが、ともかく彼女は最後の食糧を摂り、保存庫を空にした状態で帰還に成功したのだ。

ハナは、羽柴が出航前に話していた内容で、今回、二度目となる三

年間は、設備
の中が約三年、その間地球では約二三年、その差、時間差が二〇年
という、大雑
把な数字だけは記憶していた。
すると、降り立った地球の現在は二〇一〇年ということかな、ハナ
は指折り数え
そうつぶやいた。
山は着陸直後に閉じられているので、設備を出るにはもう一度山を
開閉しなくて
はならない。
その前に、ハナは、最上階のモニターで、念のため設備の回りの様
子を確認した。
まわりに誰もいないことを確認して、ハナは設備から下船した。

<十六>

現在が、二〇一〇年で正しいとして、地球上の暦で三〇年前の一九
八〇年に私た
ちが一回目の下船をしたときには、既に『羽柴数理研究所』はなく
なっていました
だが、奇妙なことに設備を降り立ったすぐのところに、その看板と
矢印が見えま
した。
私は不思議に思い、とりあえず矢印の方向に行ってみることにしま
した。
人里離れた山のふもとに立てられた看板と矢印には、一体何の意味
があるの
でしょうか。

矢印は、その昔、研究所があつた里の方と反対の方角を指しています。

研究所を訪れる人が、里の方から来ることを前提にしたものであれば、里から四ツヶ岳と禿山の間峠の方へ向かう道にその看板がないと『案内』の意味がありません。

私は、訪問者が、里の方からではなく、設備のある山の奥の方から来ることを前提にしている、と直感しました。

矢印に従って、二〇分ほど歩いて峠を下りますと、当時の木造家屋の研究所ではなく、入口に『羽柴数理研究所』と書かれたやや色あせた白いコンクリート造りの二階建てビルが見えました。駐車場には四台の駐車スペースがあつて、三台の車が停めてあります。

私は人の気配を伺いながら、ガラスの入口を引いて中に入ってみました。

左側に、『受付』があつて、ガラス窓の中で正面を向いていた事務所の女性が私

に気が付き、小さな窓を開けました。

「あの。武嶋ハナと申しますが。」

「はい。お世話さまです。どちらへ御用でしょうか。」

私は一瞬返答に困りましたが、

「所長様おられますでしょうか。」と適当に応えました。

「はい。お約束はございましたでしょうか。」と女性。

「いえ、ありません。」

「少々お待ちいただけますでしょうか。タケシマさまですね。」

「はい。」
女性は、事務所のドアから出てきて、私の脇を通り、とんとんと階段を上がっていききました。

一分ほどして、白衣をまとった男性が事務の女性と一緒に降りてきて、降りながら私の顔を階段の途中で伺ったようです。

それからその男性は事務の女性に何やら一言指示をして、自分はそのまますま上へ引き返していきました。

（やっぱり、だめかあ。断られちゃったなあ。）
すると女性は、「ご案内します。」と言って先に階段を上がり始めました。

（あれ？大丈夫だ。）
二階の所長室と書かれたドアの横を通過して、私は正面の第一応接と書かれた部屋へ通されました。

ほどなくして、とんとんとノックの音。

先ほどの男性が白衣から背広に着替えて入ってきて、後ろ手にドアを閉めました。

私は立ち上がって、
「突然すいません。武嶋ハナといいます。ずいぶん昔になりますが、こちらにお

世話になっていたことがありましたもので・・・」

ますます話は『テキスト』になっていきます。
地球上の暦はともかくとして、生きてる年数からすると、まだ私は二六歳になっただけです。

『ずいぶん昔にお世話になっていた』は、ちょっと変ですよ。

ところで、普通は、まず、どうぞとか言って相手に着席を促すのでしょうが、そ

の男性はずっと立ったままです。

直立不動。なんか締め切った個室に二人で気持が悪い。

男性は、少し肌の色が黒く、目の色もやや茶味がかっていて、日本人との混血の

ような気がしました。

第一印象としては、とても精かな印象を受けましたが、今ではちよつと薄気味

悪いです。

(文化の違い?こいつ日本人じゃないな。ちよつと早く座つてよね。この『間』

はやめてよ。・・・ん?あれあれ、目がどうした?何か変よ。くちびる震えてき

た。これは危ない。逃げ場なし。ああ、とうとう白目が充血してきた。これで鼻

血が出てきたら疑いなしだ。どうしよう。さっきの彼女に助けを求められない。

その男性の目には段々と涙が溜まってきました。そして口を開きました。

「おでこの『タンコブ』はもっと冷やした方がいいよ。ちよつと内出血している。

何か、場にそぐわない笑顔。

「はあ??」と私。

「うさぎ。僕だ。鐘鳴だ。」

「へ?」

「鐘鳴だよ。カナル。」

「へ？」

「固まらないでくれよ。」

「へ？」

とんとんとノックの音。「失礼します。」

先ほどの女性がコーヒーを二つお盆に載せて入ってきました。

女性は、不自然に立ったままの二人に、横目で怪訝な表情を投げかけながら、カ

ツプを置きました。

私は呆気にとられて、何故か「へ？」しか言葉になりません。

女性が部屋を出て行ってから、私と鐘鳴はしっかりとお互いの背中を抱いて、か

なりしばらくの間身動き一つしませんでした。

お互いに何も言わない。いえ、言えない。

沢山話すことはあるのに、何を話してよいのかちつとも思いつかない。

でも、私の気持ちは、彼の『心』と今、ひとつになっています。

おそらく彼も同じ。

世にも奇妙な物語。

私は三年振りの再会で、彼にとっては二三年振りの再会でした。

<十七>

鐘鳴、いえ、鐘鳴所長と私は、事務所を出て、しばらく河辺を歩くことにしました。

「僕は、当時、家を出て餓死寸前だったところを、誰かに見つけら

れて、しばらく

く警察に厄介になつていたが、その後、児童擁護施設に入れられた。その少しあとに、T大学の物理学研究室の羽柴先生が僕の施設にたまたま寄られ、

僕は先生を知り、君のことを話した。

君を捜して欲しいって言つて、訴えたんだ。

その二年後くらいあつたかなあ。先生が七七歳で喜寿の誕生日を迎えられて、

大学の研究室を引退するとき、当時十三歳だつた僕を引き取つてくれて、それが

ら家に住み込みで僕を助手として使つてくれたんだ。」

「羽柴先生つて、あの羽柴先生？元研究所所長の。」

「そうだよ。」

「その人、失踪後、交通事故で亡くなられたらしいつて弟の羽柴さんが言つてたわ。」

「そんなことないよ。それは自分のことを聞かされて羽柴先生のことと勘違いし

たんじゃないかな。同じ羽柴だから。君や君のお父さんもそうだけれど、何せ、

弟の羽柴さんはとくに失踪が受理されていて、死亡が宣言されていたからね。

それは君のほうがよく知っているだろう？僕はまだ小さかつたから。交通事故はきつと後からついた尾ひれだな。」

「引退後は大学の補助施設だつた今の場所に移つて、僕は研究を続けさせてもら

つた。羽柴二世としてね。」

「先生は？」

「亡くなつた。三年前。九四歳だつた。晩年はときどき研究に疲れると、設備の

あつた山に二人で行つて、座つてよく空を見上げていたものだ。
施設で偶然僕に会うまでは、弟の羽柴さんや君や君のお父さんが地球に戻つてき

たなんて知らなかつたみたいだつた。

だから、『そのとき逢いたかつた、逢いたかつた』つて空を見ながらよく呟いて

いたよ。」

「でも、弟の羽柴さんも設備の中で、三年くらい前に天に昇つていったのよ。ち

ようどびつたりね。」

私は、そう言つてしまつてから、アレ？違つかな、と思ひました。

設備の中での三年前と、地球上の三年前は全然時間が違います。

彼に馬鹿にされそうな気がしたので、私は発言を訂正しました。

「違つか。三年前の設備の中は地球上の二三年くらい前か。全然違つたわね。」

そのとき彼は、キリツとした研究者の顔になつて、はっきりと言ひました。

「違わない。一緒なんだ。二人は何かの意志に基づいて、同じところに行つた可能性がある。

設備の中と地球上は確かに時計は違つ。時計つて何だと思つ？

我々は三次元の世界にいるから、『物差し』を例に取るとわかりやすい。

地球上の三年前と設備内の三年前はそれぞれ使っている『物差し』が違つただけで、

実は同時に存在しているんだ。」

私の正直な感想はこうです。

（できれば、説明はやめて欲しいなあ。わからんですよ。私にはさっぱりん

りん、わからんちん、なの。

『物差しだとわかりやすい』ですって？そこで物差しが出てくる」と自体、意味

がわからんのよね。」

私は、その昔、彼よりずっと年上だった関係から、少し見栄を張ってこう言っておきました。

おきました。

「そうなんだ。二人は幸せね。よかった。」

（とても女らしい感想になった。）
すると彼は、

「いや、そうとも言えない。」

（一体どうなっているのよ！あなたの意見じゃなくて、あなたの頭の中！）

<十八>

彼の顔はとても得意そうでした。

「あのね。ウサギ。」

「なあに？」

「僕の研究が今回、学会で取り上げられたんだよ。」

「へへえ。すごいじゃない。」

「どんな研究？」

「一言で言つと、真空の中のエネルギーの発見さ。理論と実験ではつきりと証明

したんだ。誰もおそらく否定できない。」

(聞くんじゃないかった。)

「ふうん。」

「あのね。真空で、何も無いと思っている空間の中には、実はエネルギーを発生したり伝えたりする粒子が敷き詰められているんだよ。」

「たまたまある一定の時間帯だけを捉えれば、それが突然に発生したり、消滅したりしたように観測できるんだけど、時間と空間の座標を四次元立」

「体のようにと」

「つてみると、それが真空の中にびっしりと敷き詰められてことがよくわかるんだ。」

「ねえ、隙間なくびっしりだよ。」

「スピンしながらエネルギーの均衡状態を保ってる。」

「このエネルギーを誘発させるのが一個の電子だとして、この電子もあらゆるすべ」

「ての方向にスピンしているんだ。」

「これがエネルギーを誘発して伝えていくんだ。伝わるエネルギーっていうのはね。個体のスピンの話じゃないよ。『波』の話だよ。」

「そこを混同しないようにね。」

(心配しなくたって、普通、誰も混同なんてしないから。)

「ねえ、ねえ、ちょっと。僕の話聞いてくれる?」

「彼は、優しい顔で、しかし真剣に訴えました。」

「私はこれ以上素直についていけないと感じ、見栄を張るのをやめて降参すること」

「にしました。」

「ええ?何だか私にはむずかしくて。」

でも、彼は私を許してくれません。

「うっん。それが全然むずかしくなんかないんだ。ものすごく簡単なことなんだ。」

「

何気なく彼の横顔を見て、あまりに真剣すぎるその顔に私はびくつとさせられま
した。

「ねえ。本当だよ。嘘じゃないよ。」

(こりゃあ、本格的に面倒くさくなってきたわ。)

一度降参したのに、もう一度降参。

「はいはい。わかった。わかった。」と私。

「ん！も〜う！聞いてない。全然。」

「わかってる。あんたは偉い。そういうこと！ねっ。」

私は彼の顔を下から覗き込んで、

「あなた、ひよつとして人類の歴史を変える人？」

ああ。わかった。誰か言ってた。宇宙の真理ってやつだ。なーんちやってね。」

彼の口が段々、とがってきました。

(まずいなあ。話題変えよう。)

私は頭を彼の右胸に寄り掛るようにして言いました。

「ねえ。私、なんで『ウサギ』っていうか知ってる？」

彼は、空を見ながら、

「なんでだろうね。」と言った。

私は、「あのね、私のお母さんがお団子を食べながら月見をしたあとで私を生ん

だから、月の餅つきウサギからそう呼ぶようになった。その説が有力よ。

「彼は、草の上へのけぞって、

「はははっはは。」

と大笑いを始めました。

少ししてから、笑い涙を拭きながら、

「なるほど。ウサギは月の使者だね。かぐや姫を連れていくやつ。」

(連れていくほうかい。かぐや姫じゃないんだ。)

私は少しがっかりしました。

それから彼は、

「やっぱりその説は違うよ。絶対に違う。」

私は嫌な予感がしました。

(『ウサギ顔説』？完全に墓穴を掘ってしまったわね。)

私は彼に言われてしまう前に、自分で言いました。

「顔がウサギに似てるって言いたいんだ。」

「違う。違う。そうじゃないよ。本当の答えを、僕が知っていたらどうする？」

「????????」

彼の声は、笑い涙の声から、いつのまにか本当の涙声に変わっていました。

「会いたかった。待ってたんだ。君がきつと来るって。

何年も何年も。何年もだよ。いつか空から絶対に君が来るって。」

「.....」

彼の顔は、もうくしゃくしゃでした。

「ウサギ。僕は何度も死のうかと思った。でも、君がいつかは空から来てくれる

って。ただ、ただ。」

彼は言葉を失って肩を震わせていました。

涙が目からあふれ出て、そして頬をつたっていきました。

私は、草むらに横たわった彼の胸に、もう一度上から頬を押しつけながら、思い

ました。

（ごめんね。鐘鳴。あなたがどんなに大変だったか。本当にごめんね。）

でも、私は意地悪く彼に言っしまいました。

「ねえ、私が『ウサギ』の本当の『わけ』はどこに行っちゃったの？」

彼ははっとしたように、

「耳のところに両方の手の平を持って行って。」

（また、戻しちゃった。ウサギ顔に。）

でも、私は彼の言うとおりに、耳に両手を持って行ってウサギのまねをしました。

「君は、ウサギだよ。ぴよんぴよんって。ぴよんぴよんって。うう。時代を超えて僕のところに来てくれたから。」

でも、もう跳ねちゃだめだ。跳ねられないよ。僕が君を捕まえて離さないから。」

さっきの話。そういう『オチ』が彼にはあったんだ。

私のほうにも彼の涙顔が移されてきました。

「七〇歳を超えた私をお嫁さんにする気？」

しかも私、戸籍も持たない幽霊人間なんですけど。」

彼はむきになって言いました。

「うん。『籍』なんて、ただ人が人のことを決めるだけだよ。取るに足らない話だ。」

どこから来たかもわからない、こんな僕だって時間がかかったけど、結局日本国籍を得た。

そんなものどうにだってなるし、第一どうでもいい。

命の存在は人が決められるもんじゃない。」

何だか必死です。

「それに、年齢だって……。今、君は二六歳。僕は三三歳。ただそれだけなんだと思う。」

また、思い出したように彼は言いました。

「もうどこにも行かないよね。大丈夫だよ。」

「うん。うん。」と私。

「もつと。もつとちゃんと！」

「はい。大丈夫。もう安心よ。ダイジョーブ。」

私を見つめる彼の目。

涙の中で泳ぐ彼の顔。

そこには、この世の中で見るおそらく史上最高の涙の中の笑顔。

私の彼をいたわる気持ち、いえ、慕う気持ちはもう誰にも抑えきれない。

そして、今の彼のひたむきな気持ちが大好き。

ただ、それだけ。とっても簡単なこと。

そうか。これが宇宙の真理、かな？

あゝい。その話、どこかで違ってるぞ。

（誰？今、私に何か言ったかしら。）

『空からの贈り物 平成22年4月』

(後書き)

可也、カナリー、そして当編の鐘鳴。今回は『恋文』が随分と長くなってしまう。今読んでいるあなた。あなたですよ。私の心の恋人。気がついて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8066k/>

空からの贈りもの

2010年10月16日10時39分発行